

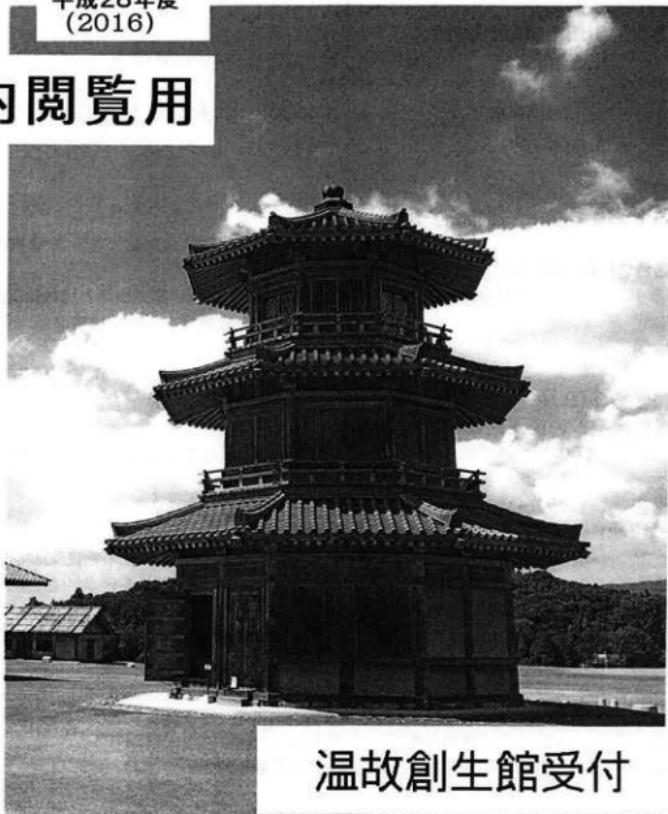
第5回

持出厳禁

鞠智城跡 「特別研究」成果報告会 発表レジュメ集

平成28年度
(2016)

館内閲覧用



温故創生館受付

平成29(2017)年 3月11日(土) 12:30~17:30
くまもと県民交流館パレア パレアホール (テトリアくまもとビル10F)

主催: 熊本県教育委員会 後援: 熊本県文化財保護協会



鞠智城イメージキャラクター
こうる君

第5回
鞠智城跡特別研究成果報告会

日時：平成29年3月11日（土） 13:00～17:30

場所：くまもと県民交流館パレア パレアホール（テトリアくまもとビル10F）

主催：熊本県教育委員会

後援：熊本県文化財保護協会

日 程

12:30 オープニング

こうう君出演、映像上映

13:00 開会

あいさつ 熊本県教育長
来賓紹介

宮尾 千加子

13:10 基調講演 13:10～14:10

「律令国家の成立と鞠智城」

近江 俊秀（文化庁文化財部記念物課 文化財調査官）

14:15 報告① 14:15～14:55

「八世紀（Ⅱ期～Ⅲ期）の鞠智城と肥後地域—新羅山城との比較検討から—」

近藤 浩一（京都産業大学 非常勤講師）

14:55 休憩

15:10 報告② 15:10～15:50

「古代肥後の氏族と鞠智城—阿蘇君氏とヤマト王權—」

須永 忍（明治大学日本古代学研究所 研究推進員）

15:50 報告③ 15:50～16:30

「10世紀における国家軍制と鞠智城」

野木 雄大（福岡県人づくり・県民生活部文化振興課
世界遺産登録推進室 主任技師）

16:30 報告④ 16:30～17:10

「AR・VR技術を応用した鞠智城跡整備の一例 - 城門遺構について - 」

山口 裕平（行橋市教育委員会 文化財専門職）

17:10 講評 17:10～17:30

岡田 茂弘（国立歴史民俗博物館 名誉教授）

佐藤 信（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

八世紀（II期～III期）の鞠智城と肥後地域—新羅山城との比較検討から—

京都産業大学・近畿大学他 非常勤講師 近藤浩一

はじめに

○鞠智城の役割・機能が各時代段階的に変化、山城經營の重層性。→I期後半（日本国家形成期）から増改築開始、八角形建物・L字建物群・倉庫建物など建造（昨年の近藤2016では新羅との対外関係を念頭に置きながら新羅山城の技術・文化的要素を想定）+II期に兵舎も消失という最近の指摘。

○大宰府政庁I期後半（新段階・689年の新城記録）、大宰府政庁II期・西海道諸国の官衙建物の造営と、大野城・基肆城、鞠智城にみる倉庫群・城門など内部施設の増改築の運動性が指摘。

※大宰府は百济泗沘都城との類似性が強く述べられているが、後述のように慶州の新羅都城の影響も否定できない。

○改めて大野城・基肆城、鞠智城II期～III期に礎石式倉庫群を中心とする建物を増築した理由は？便宜な説明（用語）としては「兵站機能」。→私もこのように考えるがこの意義付けは評価を埋没させる。

●本報告は、II期～III期の鞠智城並びに同時期に大宰府のもとで増改築された大野城・基肆城に、建物跡の大半を占める礎石式倉庫群及びその中心に大型の長倉が建設された意義を、比較的近い時期の新羅山城にみられる礎石倉庫・長倉跡との関連性に注目することで、東アジア史の側面から検討する。

1. 7世紀末～8世紀・日本古代の山城に形成された倉庫群とII期～III期の鞠智城

1) 大野城・基肆城・鞠智城の長倉・倉庫群について

◎令大宰府縛治大野・基肆・鞠智三城。（『続日本紀』文武2年（698）5月甲申条）

三城の縛治（増改築）は大宰府の西海道經營に合わせて共通の經營プランによりなされた？→大野城に70余棟、基肆城には40余棟の建物跡が確認、その大半は規格性を有した倉庫群と推定。

○大野城の時期区分と倉庫（赤司2015）→3×5間の礎石式倉庫群形成の直前に礎石式長倉が出現。



I期A 築城期～掘立柱式側柱建物 SB64は官衙風？
I期B 7世紀終わり 初めて掘立柱倉庫 SB65建設。
I期C 698年縛治記事 中心地の主城原地区に3×8間以上(3×9間)の礎石式總柱建物 SB60=長倉出現
(単弁瓦出土・瓦葺)。
II期A～720年頃(鴻臚館)
式軒瓦採用) 3×5間の礎石式總柱建物出現 (数が最大で圧倒的な規格性を有す)、掘立柱併用。
II期B 天平期頃 広範な地区に広がり約35棟。
III期 3×4間の礎石式總柱建物が多数建設。

○基肆城の倉庫・長棟建物（長倉＝大礎石跡群→）

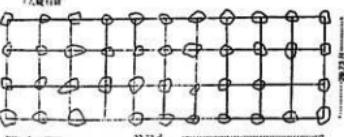
3×5間の礎石式總柱建物が23棟確認（約35棟推定）

→大宰府によるマスター・プラン想定。礎石式倉庫群建設

前に高所で最良地（北帝地区）に3×10間の長棟型式礎

石建物（長倉）を建設（下記の新羅二聖山城に類似の建物跡あり）。鴻臚館以前の半島系（百済又は新羅系）瓦が出土。

●大野・基肆城では、8世紀前半（720年頃）3×5間の礎石式總柱の倉庫群の建設ラッシュに先立ち、長倉である大型礎石建物を目立つ位置に建設。



○鷹智城の倉庫 → 3×9間の礎石式総柱建物の長倉（宮野礎石群・49号）が存在。

I期（掘建式総柱）1・5（板倉に復元）・69・70号など。※総柱の倉庫が少なく小型の側柱建物が多い。

II期 698年～掘立式倉庫群が形成 40・42・43号など⇒大野・基肄城と違い礎石式倉庫は存在しない。

※八角形建物（31・32号）・「L」字形管理棟の建物群、最大の土器の出土量。城の管理・運営に多くの人員が配置。

III期 掘立柱建物が礎石建物（小型礎石）に建て替え 22・23・34・37・49・50・65・66号など。

長者原地区西側の49号：3×9間の礎石総柱建物=瓦葺の長倉。→基肄・大野城と同様礎石倉庫に先立ち建設。※II期の管理棟の建物群・八角形建物は存続。土器などの出土が確認できないので城の活動は？

IV期 II・III期の建物群消失・礎石建物群が大型化。土器も8世紀末頃から僅かに確認・9世紀増加。

2) 大宰府による山城倉庫群の経営と古代東国（北関東）の法倉

◎「為班給筑前筑後肥等国造基肄城稻穀隨 大監正六上田=中朝×」（大宰府跡不丁官衙地区出土木簡）→8世紀前半～中葉頃、基肄城の稻穀を筑前・筑後・肥（肥前・肥後）の諸国に班給するために大宰府官人大監を派遣。稻穀は賄給のような特別な場合（疫病など）に配給される不動穀と理解された。→山城倉庫の稻穀など物品の機能・役割を示す+山城の倉庫は大宰府を中心に連絡網を持ちながら管轄。

→三城に礎石式の長倉と倉庫群が建造された8世紀前半～中葉、東北（蝦夷）経営への兵站基地（軍糧輸送など）となった坂東（特に北関東）の官衙遺跡にも、長倉（法倉、總瓦葺丹塗建物も存在）が建設。

○例えば群馬県伊勢崎市三軒屋遺跡（佐位郡正倉院内）の大型礎石建物（一号礎石建物、「実銀帳」の法土倉に比定）。+論文集に引用した川口・大橋ほか（下の『...』要旨紹介）、出浦・眞保の論著を参照。

『郡衙正倉群の中には1棟～2棟、超大型の総柱建物が含まれる例があり、その倉が法倉とされ、収められた稻穀は民を救済するために使われた。下野国（黒須官衙遺跡・長者ヶ平官衙遺跡）や常陸国（台渡里官衙遺跡）などでは、柱を丹塗りした瓦葺建物もみつかっている。正倉を瓦葺きとするのは、陸奥国と隣接する北関東の郡衙における地域的な特徴といえる。加えて、上野国の三軒屋遺跡で見つかったような八角形建物（八面甲倉）も法倉とみられる。・景観を考慮している例が多い。こうした法倉は、8世紀前半（七世紀代に遡る例はない）から建設が始まり、国家の威信や支配の正統性の誇示において直接役割を担った。一般的な正倉の礎石化は8世紀後半から。』

→鷹智城III期の49号は他の長倉に比べて少々新しいようだが、九州山城と北関東の蝦夷経営を担う官衙遺跡で法倉を中心に倉庫群が建造されたのには何らかの関連性あり？新羅系渡来人が多数移住させられた地域（+采女などを通して中央政府と深いパイプ）。東国への渡来人移配・移住例：684年5月・687年3月・同年4月・688年5月・689年4月・690年2月・同年8月・716年5月・758年8月→新羅沙門や韓奈末（新羅官位10階の大奈麻）、凜級（9階の級位准）の旧新羅官人を含む。+大舍刻書土師器・新羅土器（特に西下谷遺跡出土の瓶）、新羅系瓦。那須国造碑・下野薬師寺と新羅人の関係。

※那須国造碑：永昌という中国周の年号使用（中国状況に精通）、内容・文体からも高度な漢文能力。下野国那須官衙遺跡周辺の新羅人が作成に関与⇒古代東国は新羅の諸技術・文化的情報が豊富な地域。

→九州山城・北関東官衙の長倉（法倉）の役割・機能は地域性に関連+建設背景に新羅・新羅人の存在。

●最先端の諸技術・文化を伝播すべく旧新羅官人を含む渡来人を北関東に移したのは、律令国家成立期のその地域（東北経営をバックアップ）に対する中央政府の意思表示。新羅人たちも他地域の場合より一層能力を発揮することが可能で、重要施設の設計には那須国造碑を作成したような新羅人を登用することもあった？→当地域を象徴する建造物の法倉（長倉）には一際最新の諸技術・文化的影響が反映。+大宰府管理の古代山城の長倉にもそうした側面を想定⇒両者は南・北で離れていたながら類似するものもある意味自然→新羅の同時期に建造された山城の倉庫群との比較検討の必要性。

2. 新羅文武王・神文王代の山城建設とその倉庫—日本古代山城、鷦智城との関連性を探る—

○文武王（在位 661～681 年）・神文王代（681～692 年）の統一期（676 年に半島統一。百濟・高句麗の滅亡→羅唐戦争）→新たに領域化した地域をまとめて唐に対抗するため、集権的諸政策の実現に従事。國家再編への大きな柱は都城の整備と地方統治体制の確立（軍事・官僚・身分制度から仏教・祭祀にいたるまで諸改革を実施）。王都から地方まで山城をコアとする防護体制を整え唐に勝利、その後の統治体制の基盤を築く。この頃、山城内の長倉建設及び倉庫に関する記録がまとまって登場。

1) 府州都城の山城整備と長倉・倉庫の建設 →文武王の即位とともに加速化

新羅都城を囲む山城一覧

城郭名	築城年	増改築年	規模(周囲)	素材
都堂山土城	?		約 1 km	土城
南山土城	591 年以前		約 1.2 km	土城
明活土城	405 年以前		3.6 km	土城
乾川鶴城	5～6 世紀		2.1 km	土城
良洞里山城	5～6 世紀		0.9 km	土石城
明活山城	551 年		4.5 km	石築
西兄山城	593 年	673 年	2.9 km	石築
南山新城	591 年	663 年 679 年	4.9 km	石築
高墟城	626 年		約 3.6 km?	石築
北兄山城	673 年	(ただ、少々遡る出土遺物あり)	0.9 km	土石築
富山城	663 年		9.4 km	石築
閻門城	毛伐郡城	722 年	12 km	石築
	新堡里城	7世紀後半	1.8 km	石築

北



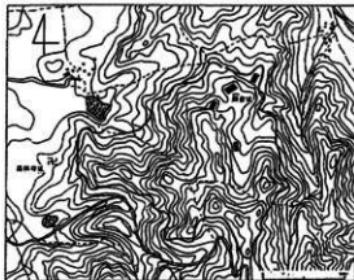
辛亥築南山城、周二千八百五十步。則乃真德王代始築、而至此乃重修爾。又始築富山城、三年乃畢。(『三国遺事』紀異第 2 文虎王法敏(=文武王)条)
 ③強首未嘗謀生、家貧恰如也。王命有司、歲闢新城租一百石。文武王曰、強首文章自任、能以書翰致意於中國及麗濟二邦、故能結好成功。(『三国史記』列伝第 6 強首条)

④時大王謂夫人曰、今中外平安君臣高枕而無憂者、是太太角干之賜也。惟夫人宜其室家敬誠相成陰功茂焉。・・・。其魏南城租每年一千石。後興德大王封公為興武大王。(『三国史記』列伝第 3 金庚信条)

⑤七月三日、大恭角干賊起、王都及五道州郡并九十六角干相戰、大亂。大恭角干家亡、輸其家資寶帛于王宮。新城長倉火燒。(『三国遺事』紀異第二惠恭王(在位 758～780 年)条)

⑥竹曼郎之徒、有得烏一云谷綱干。綱名於風流黃卷、追日仕進。隔旬日不見。郎喚其母、問爾子何在。母曰、幢典牟梁益宣阿干、以我子差富山城倉、宜聽去。行急未暇告辭於郎。・・郎徒百三十七人亦真儀侍從、到富山城。間關人得烏失矣在。人曰、今在益宣田、隨例赴役。郎歸田。以所將酒餅饗之、請暇於益宣將欲借還、益宣固禁不許。時有使吏侃砾、管收推火郡、能節租三十石、輸送城中。・・。大王聞之、勃、牟梁里人從官者並合黜遣、更不接公署。・・。(『三国遺事』紀異第 2 孝昭王代(692～702)竹旨(曼)郎)

⑦夏六月、西兄山城塩庫鳴声如牛。『三国史記』哀莊王 10 年(809)条



◎南山新城の長倉・倉庫跡 (←左図は平面図並びに倉庫跡)
史料① 文武王は 661 年に即位すると当初の 663 年から、南山新城の城内に長倉の増築と富山城の新築をセットで実施している (同時期の富山城にも長倉を建設?)。

②=南山新城長倉の規模・様相・立地を記録。「規模は長さ 50 歩・広さ (幅) 15 歩で、機能面は米穀・兵器を貯えた」「右倉・左倉」。→左図のように城内北よりの場所に三カ所倉庫跡利用礎石を確認。朝鮮總督府主導で植民地期の 1930 年代 (藤島亥治郎・小場恒吉) より実測調査。

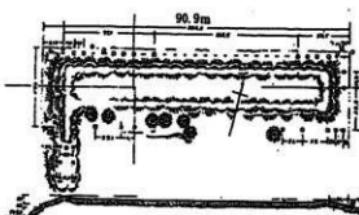
●東側倉庫跡 (倉庫跡の最上段・東一九八八 (小場一九四〇))
切り石で幅 17m、長さ 50m の長方形の土石壇をつくり、その上に礎石を置く。建物の正面の大きさは約 47.3m で、5 × 17 間である (18 個の方形礎石が 6 列に並ぶものと推定。柱間距離は外側約 3.6m・内側約 2.7m)。瓦の破片が多数確認。

●西側倉庫跡 (倉庫跡の最も下段)

三倉の内で最高處、土壇をもうけず礎石を並べる。東倉址よりやや小さく幅 15m、長さ 45m。建物正面の大きさは約 43.8m で、5 × 16 間 (柱間距離は外側約 3.7m・内側約 2.7m) である。瓦の文様から二倉より少し後代とする見解もある。

●中倉跡 (倉庫跡の中段・小場一九四〇 (建物長さは加筆))

三倉の内で最大規模。幅 23m、長さ 107m の土石壇をつくり、その上に礎石をならべる。概ね 5 × 28 間で、建物の大きさは正面約 90.9m・側面約 19.6m 規模であったと推定。30cm の大型の蓮花文軒丸瓦をはじめ多数瓦が出土しており長大な大型瓦葺建物であった。多くの炭化米が発見されているため食料を貯蔵した倉であった。また火災の痕跡もみられる。近年の調査では内部に土壁を積み上げた大壁跡が確認。



◎富山城の倉庫跡 (慶州市内から 11 km 西方、王都の外郭城。植民地期の 1920 年代から実地調査)



図のように上・下に二段 (A・B) 上倉と下倉が造成。

上段の A 建物跡は、確実な構造と規模は不明だが 80 × 65 cm 内外の自然石を利用した礎石三個残っていて下段建物との関係から倉と推定。下段の B 建物跡は、6 列に並ぶ礎石は正面 11 間 × 側面 5 間であり (礎石の柱間距離は外側約 3.4m・その他は約 2.3m)、その規模が南山新城の西側倉庫跡に類似する。統一新羅時代の瓦片が多く発見されており、南山新城と同じく 25cm 以上の大型蓮花文円瓦当も収集されている。

史料⑥=長倉をとりまく富山城内の様相と倉庫物品の運搬形態を直接伝える記録 (下は史料の要約)。

(1) 竹旨郎の花郎の得鳥が半梁部の益宣阿干から富山城の倉庫での勤務を命じられると、急であったため竹旨郎にも告げず富山城に向かい城内に滞在する。(2) これを聞いた竹旨郎は、得鳥を引き帰ら

せるために交渉しようと一行を引き連れて富山城に向かう。城に行き門番と対話すると、得鳥は半梁部益宣の田に労役に出ていることを告げられる。(3)竹旨郎は益宣の城内の田に出かけ、得鳥の帰宅を益宣に交渉するも拒絶される。(4)この時使吏の侃珍が推火郡(現在の慶南密陽)の租を富山城内に運搬してきた。侃珍も竹旨郎の意見に同調して、益宣に得鳥の帰宅を進言するも1度目は断られる。2度目に、侃珍の従者(舍知)の乗馬と鞍まで益宣に差し出しそれでようやく要望が通った。(5)この事情を聞きつけた朝廷の花主は憤慨し、半梁部の益宣一族を取り押さえ富山城内の池で11月の極寒日に贖罪の水浴びを行わせようとした。しかし益宣らは逃亡して捕まえることができなかつた。(6)こうしたことを知った新羅国王は、益宣はじめ半梁里(半梁部)の人々を公職の場から追放するようにした。なお、租を富山城内に運搬した際に得鳥の帰宅に尽力した侃珍一族は代々登用することにした。

●官吏が富山城の倉庫での勤務を命じられ滞在(門番も常駐)。租税(二重線)が富山城に直接運搬され、城内の倉庫(長倉)がその運用・管理にも関与(国家財源の蓄積場)。十都城の山城の機能を考える上で史料③(王が担当官府に命じて唐との招書のやり取りで功があった強首に毎年新城租一百石を賜う)・④(金庚信(595~673)死後に功績を称え夫人に毎年南城租毎年一千石を送る)も注目。→山城倉庫の物品(⑦塙庫も存在)は軍事防衛のみならず様々な用途に利用。+南山新城・富山城の長倉は25・30cmの瓦葺の礎石絆柱。⇒同じく長倉が存在した基肄城の「稻穀班給木簡」の内容にも通じる。

→⑤惠恭王3年(767)大恭角干の乱の際に南山新城の長倉が焼失。=国家的な反乱において山城の長倉が狙われている。8世紀後半まで最重要施設として機能。+⑦国家の動搖に際し西兄山城の塙庫が鳴く。

■文武王代(統一期)に都城整備と合わせて作られた山城内の長倉(大型瓦葺礎石建物跡)は、集権国家新羅を象徴する舞台装置であった。⇒前章では、大宰府のもとにあった大野城・基肄城・鞠智城並びに古代東国(北関東)官衙に建設された長倉(法倉)・礎石式倉庫群の重要性を指摘。→日本古代の法倉(長倉)が、新羅のそれらをモデルに建設された可能性。

※『三国史記』雜志祭記条「十二月の寅日に(南山)新城北門で八掛けを祭る」「立夏の後の亥日に新城北門で中農を祭る」「北兄山城(大城郡)は中祀」=国家祭祀の場→国家祭祀再編と長倉建設の関連性?

※728年に大宰帥の大伴旅人が勅使の石上堅魚と基肄城(大宰府の都城形成に伴いリニューアル)を訪れている。+Ⅱ期鞠智城に増築された八角形建物における祭祀と新羅の山城祭祀の関連性は?

●大宰府からみて三城は、新羅の都城と山城の関係に極めて似ている。

2) 新羅における地方山城の大型倉庫跡—広州星長城(現在の南漢山城)と河南二聖山城を例に
・文武王は唐と対峙すべく(この頃唐軍4万が平壤に駐屯)地方統治整備のため山城改築を実施。

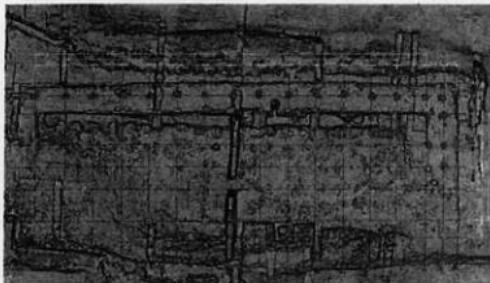
●漢山州の星長城 『三国史記』文武王12年(672)8月条「築漢山州星長城、周囲千三百六十歩。」

→長らく星長城の所在地は不明であったが、朝鮮王朝の行宮の置かれた南漢山城(京畿道広州市。仁祖4年(1626)に築城完了。2014年ユネスコ世界遺産=南漢行宮復元)の発掘調査(1998~2008年の韓国土地住宅公社土地住宅博物館1次~8次調査)で判明。※古くには百濟最初の都河内慰礼城=南漢山城説も存在。朝鮮王朝の南漢山城は天作之城と称せられる。『世宗実錄』地理志京畿(広州)条をはじめ、『朝鮮王朝実錄』・『新增東國奥地勝覽』・『大東野乘』・『燃藜室記述』・『重訂南漢志』など諸記録に行宮・城の様子を記す。

○星長城: 2005年中原文化財研究所の北門付近調査で新羅時代の城壁・土器片が発見→直後の韓国土地住宅公社土地住宅博物館6次・本格調査の7次・8次(2005~)で、行宮跡から新羅時代の大型瓦葺建物跡と大量の超大型瓦・文字瓦が発見(『南漢行宮-第7・8次調査報告書』、2010)。この地域に上の史料と同規模の山城は現在の南漢山城のみ一星長城とほぼ確定。

※7世紀初頭頃の二聖山城木簡に「南漢城」の記載があるが、木簡のそれは現在の南漢山城とは異なると推定。

◎大型の礎石総柱瓦葺建物跡：16間 53.5m×6間 17.5m。王宮・寺院級の最大規模建物。



●上に遺構跡・右上に復元図、右に超大型瓦・瓦貯蔵所
建物の四方には外陣柱間があり（雨だれが落ちる排水路を作る）、その内側に厚い壁体（2m）を備えた構造である。

礎石周辺から長さ 64 cm・重さ約 19 kg の超大型瓦が 350 枚も完形で発掘（南漢山城の朝鮮時代の瓦は 3.98 kg 程度）。
超大型瓦の大半は初期のIV層から出土。

→これに耐えられる構造建築物＝報告書では穀物と武器を保管する軍事的倉庫とするが、漢山城の行政的な建造物（宮殿のような機能）と考える見解もみられる。私見では、南山新城の長倉（特に 47.3m の東側倉庫跡）とはほぼ同じであり、また壁体を持つ構造も同じく南山新城の中倉にみられるることから、王都山城の長倉のプランを真似て建造したと考え

る。城内の最良地に視覚的にも優れた大型倉庫が建設されたのは、南山新城・富山城など都城山城並びに日本の北関東・九州山城の長倉（法倉）の役割にも通じる。←672 年前後は既存の州郡制の再編成が推進されている最中（羅唐戦争を目前にひかえ漢江流域の漢山州は最重要の兵站基地）。→文武王を頂点とする新羅朝廷の象徴物（最大規模の長倉として）、集権・統治体制強化に一層の効力。

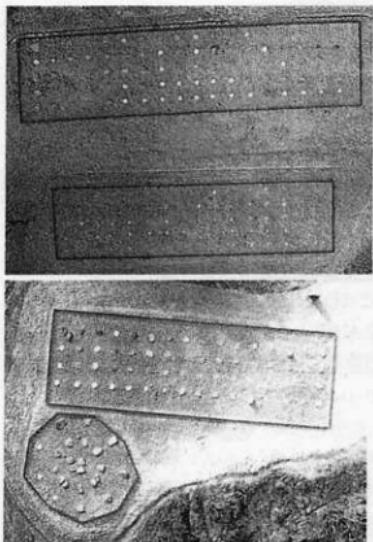
○文字瓦が多数出土（比較的新しい I 層・II 層）。「甲辰年末村主敏亮」（最も多い）「末村主敏亮」「麻山停子瓦草」銘の瓦が多く、「草瓦」「丁巳年」「城」「天主」「白」「香」などの銘も存在。年代は「甲辰年」から 764・824 年と推定（824 年が一層有力視）。→この建物は何度も改築を経て九世紀代まで健在であった。在地の村主・末村主が増改築工事に動員、恒常に山城経営に関与した可能性も想定。

※III期鞠智城では「秦人忍口（米）五斗」木簡が出土し郡レベルが米を運んだことを確認。十広州昇長城でも瓦の出土が多いが武器の出土ではなく土器の出土もごく僅か。→両者の比較検討も可能？

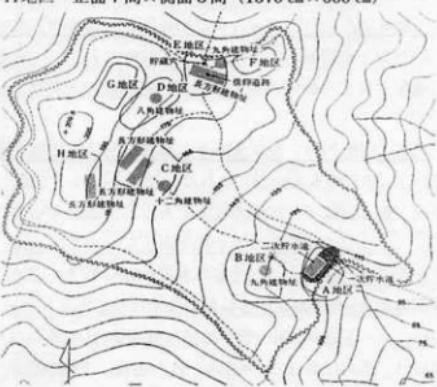
●京畿道河南市の二聖山城（昨年度の論文集では八角形建物を中心に鞠智城との関連性を指摘）

	前期（6世紀中葉）	後期（7世紀後半・8世紀初～9世紀末期）
城壁	1次城壁	2・3次城壁
貯水池	1次貯水池（戊辰年（608?）木簡出土）	2次貯水池
建物など	E地区建物、C地区1・2号長方形建物 単弁瓦、貯蔵穴	八角・九角・十二角建物が増築、長弁瓦、貯蔵穴埋め立て

◎長方形総柱礎石建物跡が次のように四棟存在（前期のC地区1・2号及びE地区的ものは大型）



↑上図：C地区1号・2号/下図：E地区 長方形・九角形建物
C地区1号 正面17間×側面4間 (3620cm×800cm)
C地区2号 正面16間×側面4間 (3400cm×800cm)
E地区 正面15間×側面4間 (3202cm×788cm)
H地区 正面7間×側面3間 (1370cm×660cm)



◎二聖山城の長方形の礎石建物跡は、最大規模の長倉で

ある南山新城や南漢山城の例に比べれば小規模だが、日本の基肄城の長倉とほぼ同じ規模である。

3. 八世紀の肥後地域と律令国家日本、東アジア－耽羅（濟州島）との関係を中心に—

1) 遣唐使航路の開拓・南島政策と耽羅（濟州島）、肥後地域

698年～8世紀前半 II期鞠智城の縛治・隆盛期⇒律令国家成立に伴う南島政策（698年4月・699年11月・700年6月の覇國使派遣）・南九州の隼人支配（三野・福積城築城へ薩摩・713年大隅国設置）

※吉村2014は覇國使派遣の出港地に肥後國飽田を想定。→覇國使には遣唐使の新航路開拓の目的も。

○遣唐使のルート：平戸や五島列島から東シナ海を横断する南路、九州を南下し南島を伝い横断する南島路（正式ルートと認めない説も多いが南島牌からもルートは存在→トラブル発生時のバックアップ体制も構築）を選択⇒南島をとりまく東シナ海の重要性、肥後地域（鞠智城も？）の役割は増大。

●南路・南島路使用から耽羅（濟州島）の存在を一層認識⇒森克己の先駆的研究：8世紀の遣唐使関係史料・日羅関係史料をもとに、遣唐使派遣における南島路・南路の使用、それに伴う対新羅外交（遣新羅使）の目的、耽羅の問題という三者を、一括りにして明瞭に説く。→批判的な見解もあるが概ね妥当。

※779年の日羅両国間の外交で耽羅抑留の海上三狩を救出した記録は有名だが、8世紀以降も唐への往来時は新羅領の耽羅に漂着する場合に備えて新羅に保護を依頼する目的があった。+8世紀初頭から新羅へ「仮道」の礼。

○耽羅（統一前後は頻繁に使節来日。文武王19年<679>に新羅に隸属）に対する情報収集の必要性。

◎栄山江流域の前方後円墳、磐井・日羅などに代表される6・7世紀以来、白村江の戦以後も有明海地域・肥後と朝鮮半島西南地域の交流は活発。→8世紀律令国家日本と東アジア史のなかで有明海地域・肥後の位置づけは一層上昇？

2) 耽羅（濟州島）と有明海地域・肥後の交流史

○森公章・秦栄一の研究：①・②二重線の「耽羅嶋人」「耽羅方舡」から当時の耽羅と日本の交流を検討。

①廿一日向京（耽羅嶋人廿一人、四日食稻卅束六把、酒六斗七升二合、塩一升六合八勺）、部領使（長

門国豊浦郡擬大領正八位下額田部直広麻呂、・・・。 (「天平十年(738)周防國正税帳」『大日本古文書』2-33) ②耽羅方舗肆具備稻陸拾束(具別十五束)。(同上2-38)

●738年に耽羅島人が来日し都に行ったことと、周防国が耽羅方舗を耽羅島人から購入したことを確認→彼らは外交使節ではなく漂流民の可能性が高いこと、耽羅方舗は鹿・牛・猪のどれかの乾肉と推論。

◎『延喜式』主計上式のなかに肥後国が「耽羅鰐」39斤、豊後国も「耽羅鰐」18斤を調として貢進していたことを指摘。ただし、平城京木簡に745年に志摩国が耽羅鰐を貢上した記録があるため、耽羅鰐は種類を表す可能性が高いと指摘⇒耽羅鰐の名称は定着→両地域間の交流の深さ・交易活動を物語る。

○天平12年(740)、乱に失敗した藤原広嗣は肥前値嘉島から耽羅に渡海・亡命を企てている。

※10月29日の東人の奏によれば、敗走後23日に広嗣は肥前松浦郡値嘉島長野村で捕まつた。官軍の軍曹柴大養五百依が、広嗣の従人であった三田兄ら20余人を取り調べた結果、広嗣は知鷺島から船で発し、4日して耽羅島の近くまで到ったものの、一日一夜漂遊し、逆風にあって等保知禪島の色都島に吹き返されたという。(『続日本紀』天平12年(740)11月戊子条の要約⇒あと一步で耽羅へ)

■五島列島・有明海地域と耽羅の間では交流があり両者をとりもつ勢力(白水郎・土蜘蛛とされる海人)が存在。=『肥前国風土記』松浦郡値嘉郷「此の島の白水郎、容貌は隼人に似て、恒に騎射を好む。其の言語は、俗人に異なり」→長洋一氏の指摘:土蜘蛛伝承(肥前・豊後国に多い)・新羅征討計画時も肥前の動員は水手(多数)のみ+史料「肥人」の存在。有明海地域の海上勢力の動向⇒耽羅・朝鮮半島西南地域と歴史的にも交流の深い肥後地域の果たす役割は一層増大、政府の関心を集めること。

3) 大湊・鞠智城の増築と東アジア交通 ⇒対外政策をバックアップする施設、兵站基地は?

○五島列島には現在のところ拠点となる古代の遺跡が発見されず外来系遺物も新羅土器の破片や新羅仏像(後世の倭寇が持ち込む)以外発見されず⇒古代(8世紀)には最前線にそうした施設が造られることはなく、鞠智城など既存の施設が遣唐使の航海などのバックアップ(兵站)の役割を担つた?

●玉名郡の大湊(熊本県内で唯一「大湊」の地名。立願寺で大宰府系瓦に加え新羅系複蓮弁瓦が出土)。→遣唐使関連、南島・南九州政策、耽羅問題、海上勢力問題など日本側の東アジア交通をバックアップ。

■近隣の鞠智城の増改築に直接影響を及ぼした。→東アジア交通・国際環境に対処すべく鞠智城は変化。

※大湊は8世紀末の菊池川氾濫による堆積で機能を停止したと推定されているが、875年6月には「大鳥ニ集肥後国王名郡倉上」とあり、同時期の鞠智城でも類似する倉庫の異変が報告。鞠智城の終末期まで両者の関わりが推定。

○鞠智城を含む三城の長倉・礎石式倉庫群に収められた備蓄の稻穀・物品は、想定外の緊急時や対外的なマネジメントへの使用を当初から意図。※大量の稻穀は、11世紀の事例であるが九州のブランド米(「鎮西米」)の輸出状況を考えると対外交易に利用された可能性までを推測?

むすびにかえて—石上麻呂・大伴安麻呂・大伴旅人、道君首名と新羅—

◎8世紀初頭の大宰府官人と肥後国司は新羅・新羅人と深い関係を有した⇒大宰府・山城経営に影響?

○大伴安麻呂(705~708大宰帥):686年筑紫に派遣され新羅使節金智祥を接待。

○大宰旅人(728年頃大宰帥):720年~隼人の反乱鎮圧参加・鞠智城来城の可能性。基肄城を訪問。

■大伴安麻呂邸宅に新羅人が居住:『万葉集』巻3-460・461天平7年(735)大伴坂上郎女が新羅國尼の理顛の死を悼んで作った歌「大納言大將軍大伴安麻呂卿の家に住みつきはや数十年経つた。・・・」⇒理顛は僧侶であるが、他の専門的な技術・技能を有した新羅人も居住し大伴家に伝授したと想定。

○肥後国司道君首名(663~718):712年9月~713年8月遣新羅大使の経歴、帰国後すぐ筑後守・肥後守に任命。味生池の造営→新羅の灌漑技術(氷川青堤碑など参照)を肥後にもたらした?

【論文要旨】

八世紀（II期～III期）の鞠智城と肥後地域 —新羅山城との比較検討から—

近藤浩一

本稿は、II期～III期の鞠智城並びに同時期に大宰府のもとで増改築された大野城・基肄城に、建物跡の大半を占める礎石式倉庫群及びその中心に大型の長倉が建設された意義を、既存の研究のように国内の地域支配の視点のみならず、比較的近い時期の新羅山城にみられる礎石倉庫・長倉跡との関連性に注目することで、東アジア史の側面から明らかにしようとしたものである。

まずこれに先立ち、九州の三城のみならず東北経営の兵站基地に位置づけられている古代東国（北関東）の官衙遺跡でも、律令国家成立期にみる礎石式倉庫群の建設の直前に、視覚的に優れた場所に長倉（法倉）が建設されたことに触れた。7世紀末より東国地域には多数の新羅人・渡来人が移配されていたことで知られるが、北関東と大宰府を中心とする三城では距離的には対極にありながらも、最先端の新羅・半島の諸技術・文化的影響が及んだ地域として多くの類似点があることを指摘し、長倉（法倉）の設計図（建設）にもこうした影響が伴っていたと推察した。

次にこれを踏まえて、比較的同時期の新羅都城の山城に築かれた礎石式の長倉・倉庫跡並びに近年の発掘成果で明らかになった広州星長城（現在の南漢山城）や河南二聖山城の大型瓦葺礎石総柱建物跡に目を向いた。まず王京を囲む南山新城・富山城などの山城では、文献はじめ考古学・実地調査からも長倉・倉庫跡の存在が明らかであるが、都城山城の整備（増改築）並びにその場所への長倉・倉庫建設は、羅唐戦争前後（統一期）の文武・神文王による集権体制整備の一環であったことを指摘した。史料から窺われる山城倉庫跡の実体も、籠城用の備蓄施設以上に多様な役割・機能を遂行する施設物であった。さらに、羅唐戦争前夜の672年に漢州に築城された最大規模の地方山城・星長城などでも、長倉とみられる大型建物が建設され瓦の出土状況から9世紀末まで存続したことをもとに、長倉が地域社会で果たした役割も検討した。新羅山城の長倉こそ、日本古代の北関東や九州三城の長倉（法倉）以上に、文武王代の集権体制を象徴する舞台装置であったと考えられる。

そして、九州の三城、中でも肥後地域の鞠智城に、長倉・礎石式倉庫群が形成された背景・目的を探るために、8世紀律令国家成立期の東アジア交通の展開に注目した。鞠智城の縄治と隼人・南島支配の関連性は検討されることはあるが、ここで注目したのは对外政策の最大事業であった遣唐使の再開、特に南島路・南路への航路変更による影響である。遣唐使の体制を築く上で新たに耽羅（济州島）問題が浮上してきたことを指摘し、歴史的に交流実績をもつ有明海・肥後地域への関心は一層高まったと推察した。日本側の東アジア交通のバックアップに加え両地域間で活動した海上勢力を抑える拠点には、例えば玉名郡の大湊が想定でき、その近隣の鞠智城には多大な影響を及ぼしたのであった。とすれば山城に新設された長倉及び礎石式倉庫群は、8世紀の東アジア交通の展開を見据えた大宰府の強化を目的にしたもので、新羅などの最先端の諸技術が投入されて一層発展した古代山城の姿をあらわしているといえる。なお最後に、8世紀前半の大宰府官人（石上麻呂、大伴安麻呂・旅人）並びに肥後國司（道君首名）の多くが、遣新羅使の経験や邸宅に常駐した新羅人ととの関係から、新羅の諸技術に精通していた可能性までを言及した。

古代肥後の氏族と鞠智城

— 阿蘇君氏とヤマト王権 —

報告者：須永 忍

1. はじめに

◆鞠智城の築城要因・造営位置

- ・①有明海監視、②北九州防衛における兵站、③対熊襲・隼人対策【坂本、1937など】
→主たる築城目的は、交通の要衝かつ穀倉地域である菊鹿盆地をおさえ、物資を貯蓄し、北九州などへ送ること【木村、2014】
…兵站的役割という、白村江敗戦(663)以後の对外政策に関連付ける②の検討視角は重要

◆鞠智城と肥後の氏族

- ・鞠智城は「官営」であり、肥後の有力氏族の思惑などによって造営されたものではない
→ただし、地域に影響力を有し、事情に精通していた有力氏族が全く関与していないともいえない
…唐・新羅侵攻の危機に対して、防衛施設の構築が急務となっており、築造を早めるためにも国造をはじめとする有力氏族に協力を要請、見返りに国造などの地位を保障した可能性

◆阿蘇君氏について

- ・阿蘇国造に任命された肥後の有力氏族
- ・阿蘇郡城を基盤とし、阿蘇神社などを管理、勢力圏は同郡域に収まる【井上、1970など】
→鞠智城に最も近い地域を拠点とした肥後の国造、阿蘇郡城と菊池郡城は隣接
…しかし、八代郡城を本拠とした肥国造の肥君氏と比較すると、あまり注目されない傾向

⇒本研究では阿蘇君氏の再検討を行い、同氏の重要性を指摘し、鞠智城との関係について考察

2. 阿蘇君氏と那津官家

◆那津官家の修造

*史料1『日本書紀』宣化元年(535)5月辛丑条

詔曰、食者天下之本也。黄金万貫、不可、棄、飢。白玉千箱、何能救、冷。夫筑紫國者遷還之所、朝届、去來之所、開門。是以海表之國候、海水、以來賓、望、天雲、而奉賈。自、胎中之帝、洎、于朕身、收、藏、穀稼、蓄、積、儲糧。遷設、凶年、厚饗、良客。安、國之方、更無、過、此。

故朕、遣、阿蘇仍君、(未、詳也。)加運、河内國茨田郡屯倉之穀。蘇我大臣稻目宿禰、宜、遣、尾張連、運、尾張國屯倉之穀。物部大連魚鹿火宣、遣、新家連、運、新家屯倉之穀。阿倍臣宜、遣、伊賀臣、運、伊賀國屯倉之穀。修、造官家那津之口。

又其筑紫・肥・豊三国屯倉、散在・懸隔。運輸逼阻。僅如須要、難以備・卒。亦宜、課・諸都・分移、聚・建那津之口、以備・非常、永為・民命。早下・郡県、令・知・朕心。

- ・古代九州的一大拠点であり、大宰府の前身ともされる筑紫の那津官家の修造記事
- ・潤色が著しく、筑紫・肥・豊の屯倉から倉・穀の一部を那津の口に移すという部分は 6世紀中葉以降の史実を反映している可能性があり、那津官家がこれらの屯倉を統制下に置く政策が実施【酒井、2008】
- ・大規模化する対外政策に対し、諸国の穀を蓄積させて那津官家の兵站化を狙った施策【仁藤、2009】
 - 「阿蘇仍君」が那津官家の造営において重要な役割を担う
 - 「阿蘇君」(あそのきみ)が「阿蘇仍君」(あそののきみ)と誤記され、『紀』編纂者が認識できず「(未、詳也。)」なる注を付す、すなわち「阿蘇仍君」=阿蘇君氏
 - …こうした注が付いていることから、阿蘇君氏が那津官家修造の中核的立場にいたことは史実性が高いと評価でき、肥後居指の肥君氏が抜擢されていないことは重要
 - …那津官家近隣の東光寺剣塚古墳は肥後系の石星形を内蔵しており、同官家の現地管理者たる筑紫三宅連氏と阿蘇君氏の密接な関係を示唆【桃崎、2014a】

◆阿蘇君氏と肥後北部

- ・那津官家の物資運送は恒常的なものであることから【松原、1983】、6世紀中葉以降、阿蘇君氏が那津官家の経営・機能維持に深く関与
- ・比恵・那珂遺跡群の大型建物が大宰府・大野城の成立とともに衰退することから【米倉、1993】、阿蘇君氏の那津官家との関わりは7世紀後半頃まで続く
 - 6・7世紀における、阿蘇君氏の本拠地たる阿蘇郡域と那津官家のつながりが問題となってくる
 - 後述のように、阿蘇君氏のもとで飼育された馬は荷馬として那津官家への物資運搬に利用されたと想定されるが、その際ルートの整備も不可欠となる
 - …車路は阿蘇一合志一菊池一山鹿一玉名一筑紫(那津官家)というルート【鶴崎、2011】
 - …途中の菊池郡城は、6世紀後半以降における屈指の穀倉地帯であり【木村、2011】、那津官家の機能維持を志向する阿蘇君氏が注目・確保すべき地域

⇒九州における地位を高めたことを背景に、阿蘇君氏が肥後北部へ勢力扶植を行った可能性

- ・阿蘇君氏が阿蘇国造に任命された後は、徐々に阿蘇国に包括していったと想定される
 - 特に菊池郡域は阿蘇国に含めるべき重要地域
 - 阿蘇君氏の支流たる阿蘇直氏の祖は「建句々知(菊池)君」(「阿蘇家略系譜」)、菊池郡域と何らかの関係【田中、1960】
 - …阿蘇君氏が菊池郡域を強固に掌握するために送り込んだ氏族?

3. 阿蘇君氏と肥後北部の有力氏族

◆二重牧について

*史料2『延喜式』兵部省式

諸國馬牛牧。(中略)肥後國。(二重馬牧・波良馬牧。)(中略)

右諸牧馬五・六歳、牛四・五歳、毎年進・左右馬寮。各備・梳刷・剣。其西海道諸國、送・大宰府。但帳進・省。凡肥後國二重牧馬、若有・超・群者進上。余充・大宰兵馬及當國・他國駅・伝馬。

- ・西海道諸国馬牧で育成された馬は、大宰府に送る規定
- ・肥後の二重牧にて飼育された馬は、大宰府の他にも中央や西海道諸国にも貢納される
→阿蘇郡域の二重牧がとりわけ大規模な馬牧であったことを示す
- …5世紀代には阿蘇山付近において馬飼育が開始され、軍馬として活用【桃崎、2014b】

◆阿蘇君氏と二重牧

- ・6世紀以降における二重牧周辺の有力勢力として、特異な地位を確立した阿蘇君氏が存在
→二重牧の經營者として阿蘇君氏が注目される
- …馬は那津官家の物資を運送するのに有効であり、同官家の經營を行うためにも重要

◆肥後北部の有力氏族と馬

- ・永安寺東古墳や弁慶ヶ穴古墳など、玉名郡域・山鹿郡域の有力古墳では馬の装飾画が認められる
- ・肥後北部の多くの有力古墳からは馬具が発見されている
→肥後北部の有力氏族が馬を重要視していたことを示す

→阿蘇君氏が肥後北部の有力氏族に対し、勢力扶植の対価として馬を提供していた可能性

- ・阿蘇郡域の上御倉古墳は、肥後北部の有力古墳と設計・規模が近似しており【高木、2012】、阿蘇君氏と肥後北部の有力氏族の密接かつフラットな関係を読み取れる
→阿蘇君氏も6世紀段階では新興氏族であり、肥後北部を掌握するためにも妥協策を採用
- 肥後北部の有力氏族は、磐井の乱にて磐井に加担して勢力を低下させており【瓜生、2009】、再起のためにも阿蘇君氏に協調し、那津官家の經營に参加する必要性
…さらに、肥君氏にとっても那津官家の經營に関与している阿蘇君氏は注目・協力すべき存在であり、阿蘇君氏も筑紫に勢力を有する肥君氏との協調は必須
→両氏は同族関係にあり『古事記』神武段 etc)、鞍の提供や馬の供給も想定される

4. 阿蘇君氏と鞠智城

◆白村江敗戦と那津官家の衰退

- ・白村江敗戦によって、唐・新羅軍が筑紫に襲来する可能性が高まる
→海岸線に位置する兵站施設、那津官家のより内陸に移すことが不可欠
- 最前線になり得る筑紫を支援する新たな兵站基地を造営する必要性
…阿蘇君氏の那津官家との関係は解消
…比恵・那珂遣駆群の大型建物は大宰府・大野城の成立に伴い衰退(前述)

◆新たな兵站施設の造営

- ・王權は新たな兵站基地造営を、兵站構築・維持のノウハウを備える阿蘇君氏に期待・要請
→阿蘇君氏は大規模な氏族ネットワークを有しており、多くの有力氏族を協力させることが可能
- 阿蘇君氏としても、自氏を100年近く特異な地位に押し上げた兵站構築・維持の実績は不可欠、同氏が王權に新たな兵站施設の造営を申請した可能性も
…造営位置は、阿蘇君氏がその影響力を發揮し易い地域ということも条件となってくる。例えば、筑紫君氏の勢力圏に造営すると、阿蘇君氏が干渉し難くなる

⇒王権と阿蘇君氏が協調して、同氏の影響下にある菊池郡域に鞠智城を造営

- 菊池郡域に築城された要因は、先行研究で説かれている交通の要衝・生産性の高い土地という条件の他、阿蘇君氏の影響力が深く浸透した地域であることも関係
- ・筑紫から一定程度離れ、広い平坦面を持つ米原台地が存在し、兵站施設構築に適している【五十嵐、2015】
 - 阿蘇君氏と密接に関係する、肥後北部の有力氏族や肥君氏も築城に協力していく
 - …築城に貢献することで、国造や評造など地方における有力な地位を獲得・維持

5. おわりに

鞠智城が菊池郡域に築造されたのは、当該地域が交通の要所・生産性の高い土地であるということの他、对外政策における兵站基地の構築・維持に長けていた阿蘇君氏の勢力下にあつたことが関係してくる。そのため、阿蘇君氏は兵站機能をも有する鞠智城の造営をスムーズに進展させることができたと評価できる。

以降の鞠智城に阿蘇君氏などの有力氏族がどのように関与していったのかは不明であるが、肥後の有力氏族の動向に注目する視点も必要と思われる。

参考文献

- ・五十嵐基善「西海道の軍事環境からみた鞠智城の機能」『鞠智城と古代社会』3、熊本県教育委員会、2015年
- ・井上辰雄『火の国』学生社、1970年
- ・瓜生秀文「筑紫君船井の乱後の北部九州」(長洋一監修・柴田博子編)『日本古代の思想と筑紫』櫻歌書房、2009年
- ・木村龍生「鞠智城跡の古墳時代後期後半の集落について」『熊本古墳研究』4、2011年
- ・木村龍生「鞠智城の役割に関する一考察」『鞠智城跡II』論考編1、熊本県教育委員会、2014年
- ・酒井芳司「那津官家修造記事の再検討」『日本歴史』725、2008年
- ・坂本経堯「鞠智城址に擬せられる米原遺跡に就て」(坂本経堯先生著作集刊行会編)『肥後上代文化の研究』肥後上代文化研究所・肥後考古学会、1979年(初出1937年)
- ・高木恭二「菊池川流域の古墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』173、2012年
- ・田中卓「古代阿蘇氏の一考察」『田中卓著作集』2、国書刊行会、1986年(初出1960年)
- ・鶴嶋俊彦「古代官道車路と鞠智城」(鈴木靖民編)『古代東アジアの道路と交通』勉誠出版、2011年
- ・仁藤敦史「古代王権と「後期ミヤケ」」『古代王権と支配構造』吉川弘文館、2012年(初出2009年)
- ・松原弘宣「羅波津と瀬戸内支配」『ヒストリア』100、1983年
- ・桃崎祐輔「ミヤケと北部九州の遺跡」『六世紀の九州島 ミヤケと渡来人』(掘ったバイ筑豊2012古代史シンポジウム記録集)、嘉麻市教育委員会、2014年 a
- ・桃崎祐輔「遠賀川流域のミヤケと渡来人について(討論)」『六世紀の九州島 ミヤケと渡来人』(掘ったバイ筑豊2012古代史シンポジウム記録集)、嘉麻市教育委員会、桃崎氏の発言箇所による、2014年 b
- ・米倉秀紀「那津官家?」『福岡市立博物館研究紀要』3、1993年

【論文要旨】

古代肥後の氏族と鞠智城

— 阿蘇君氏とヤマト王権 —

須永 忍

本論文は、6・7世紀の肥後における有力氏族の検討を通して、鞠智城の築造要因・造営位置の問題を考えるものである。とりわけ鞠智城に近接する阿蘇郡域を基盤とした有力氏族、阿蘇君氏に着目し、同城との関係について考察している。

筑紫君磐井の乱以降、阿蘇君氏はヤマト王権より信頼性の高い九州の有力氏族として捉えられ、対外政策の重要な兵站基地たる那津官家の修造・維持に密接に関与するようになる。そして、王権の一大政策における重要な地位に抜擢されたことを背景に勢力を高め、鞠智城が位置する肥後北部へ影響力を扶植したと評価できる。阿蘇君氏にとって生産性の高い肥後北部を確保することは、那津官家の兵站機能を維持するためにも不可欠であり、同氏が阿蘇国に任命されると阿蘇国に包含されていったと捉えられる。

また、阿蘇君氏は大規模な馬牧となる二重牧の運営に関わり、対外政策における軍馬や那津官家へ物資を運ぶ荷馬を飼育し、さらに肥後北部の有力氏族に対して影響力を扶植する対価として馬を供給していたと考えられる。肥後北部の有力氏族は、阿蘇君氏に協調して那津官家の経営に関与することで、勢力を保持していくといったといえる。加えて阿蘇君氏は、肥後のみならず筑前・肥前方面にも勢力を拡大させていた肥君氏と同族関係を結び、相互に依存しつつ対外政策に貢献していたことが指摘できる。

白村江敗戦後、唐・新羅軍侵攻の危機により筑前などが最前線となる可能性が浮上してくるが、王権は兵站機能の構築・維持に長けていた阿蘇君氏に対し、それらの地域を支援する兵站基地の造営を命じたと考えられる。王権の要請に応えた阿蘇君氏は、自氏の影響力が強く浸透している地域から、生産性も高い菊池郡域を選定して兵站施設を造営したと捉えられる。このようなプロセスを経て、兵站機能も有する鞠智城が築城されたと評価できる。

十世紀における国家軍制と鞠智城

福岡県世界遺産登録推進室 主任技師
野木雄大

はじめに

○鞠智城の機能論：〔坂本 1937〕による三分類を出発点

- ①有明海から侵入した外敵に対する防衛、②大宰府の非常に備えた物資・兵器の貯蓄、
③熊襲（九州南部）に対する拠点

〔木村 2014〕による批判

- ・鞠智城から有明海及び熊本平野以南を目視できない（GISによる可視範囲の分析）。
- ・築城時に熊襲・隼人の足跡が確認できない。
- ・鞠智城が後方支援できるのは肥後国府及び大宰府ないしそれと同等の距離まで。
- ・航行・上陸が難しいため唐・新羅連合軍がわざわざ有明海を目指して侵攻することはない。

→①と③を明確に否定。

〔熊本県教委 2012〕：IV期に中枢施設の消失、礎石建物の大型化、貯水池機能の縮小など、鞠智城の管理・運営主体に大きな変化が生じ、食糧の備蓄施設としての機能が中心となる。

〔能登原 2014〕：八世紀後半～末、菊池川中流域をはじめとする肥後国内における稻穀生産力が発展したため、基肄城と同様、稻穀を貯蔵するための礎石建物の倉庫群が新たに建てられ、飢餓や不作の時に西海道諸国に班給していた可能性を指摘。

→IV期以降は②の機能が中心。

○火（肥）君・九州南部に対する牽制：〔富田 1979〕〔長 1991〕〔柿沼 2014〕

→〔木崎 2014〕：おつぼ山神籠石から帶隈山・阿志岐城・把木・高良山・女山を経て鞠智城に至る「無記載山城」が、石製表飾出土古墳を周縁する。これらは筑紫君や火（肥）君、日置氏など菊池川流域の豪族に対する牽制するため築かれた。

⇒有明海の豪族に対する牽制+②を目的として築城され、IV期に②の比重が増加。

* V期：IV期の倉庫としての機能が継承されたという評価のみ。特に十世紀の鞠智城に対する研究は文献史料がないことからほとんど進んでいない。

→十世紀は列島全体で新たな軍事的危機と大きな社会変動が起きた時期。

十世紀の国家軍制の転換に焦点を当て、V期の鞠智城を位置づける。

1. 9～10世紀における軍事危機と「党」

（1）「群盜」蜂起 —「党」と「留住」—

○9世紀から現れる「群盜」蜂起。

〔戸田 1968〕：反権力集団である「群盜」などの「党」とは、國務対抗、官物掠奪、官衙放火、国司襲撃、武装反乱を行う存在。在地富豪層の組織する家父長制集団を核とし、留住貴族や百姓、隸属民、流民、浪人などの諸階層を含む広範な反律令的勢力の連合組織。

→史料上の「群盜」「党類」「海賊」「賊徒」「凶賊」＝「党」という用語で統一。

【史料 1】『類聚三代格』卷十九「禁制事」寛平 3 年（891）9月 11 日官符

秩満解任之人、王臣子孫之徒、結党群居、同惡相濟、僕媚官人、威凌百姓、妨農奪業、為蠹良深。宜嚴檢括活動、還本郷、情願留住、便即編附。

〔戸田 1975〕：「土着」＝子孫代々の定住、「留住」＝一代限りの定住を表す概念。

→史料に見える「留住」の共通性は、不当な行為を背景としている。

○「留住」＝本来帰るべき場所に帰らず、不当な行為を行いながら居住すること。

→「留住」が「党」が形成される上で重要な要因となった。

(2) 「党」の構成要素

- ・「党」の中心となった「富豪層」 = 多様な階層を内包する概念
- 「党」を構成する階層とその活動を具体的な事例から明らかにする。

・院宮王臣家・諸司使

【史料2】『類聚三代格』卷十九「禁制事」寛平6年(894)7月16日官符

応禁止諸院諸宮諸司諸家使等強雇往還船車人馬事

右得上聽越後等國解稱、得諸郡調綱郡司并雜掌丁等解稱、進上調物以駄為本、運漕官米以船為宗。而上道之日前件諸院等使、結党路頭、追妨駄馬、率類津辺覆奪運船。於是心遂馬、無顧收荷、官物致失之煩、綱領陷遐留之責。

・衛府舍人

【史料3】『類聚三代格』卷二十「断罪贖銅事」昌泰4年(901)閏6月25日官符

右得播磨國解稱、調庸租稅、國之大事也。此國百姓過半是六衛府舍人、初府牒出國以後、偏稱宿衛、不備課役、領作田耕、不受正稅、無道為宗、對押國郡、或所作田稻荷、取私宅之後、每其倉屋、爭懸勝札、稱本府之物、号勢家之稻、或事不獲已、収納使等認徵之時、不弁是非捕以凌擗、動招群党、志作淫惡。

→その他、「浪人」「浮囚」「郡司」といった人々も「党」として活動。「党」には様々な階層が含まれており、「群盜」行動もそれを発生させる要因は多種多様。

→「党」は当該期の国家にとって最大の軍事的危機。

2. 国家軍制の転換と鞠智城の終焉

(1) 新羅海賊と鞠智城

・新羅海賊の出現：弘仁2年(811)を初見として10世紀中葉まで継続。

→「党」による国内の治安悪化に加えて、西海道における対外的脅威。

・貞觀8年(866)、有明海に近い肥前国基肄郡・藤津郡・高来郡の郡司らが新羅人とともに對馬を襲う計画が報告される。その3年後の6月、新羅海賊が実際に博多津に襲来し、「豊前国年貢綿絹」を掠奪。

▼寛平5年(893)閏5月、肥後國飽田郡が襲撃される²。

→天智期の対外的脅威と異なり、実際に西海道、特に肥後国が襲われた。

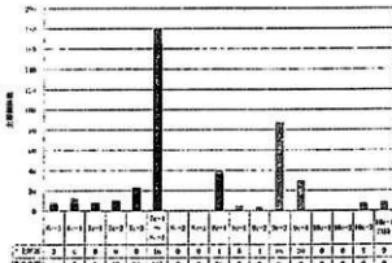
⇒外敵による侵略が恐怖感や風聞といった心的なものではなく、現実の事件となり、その現場として有明海沿岸が意識される。

・大宰府や肥後国で「大島」が現れ³、筑前・肥前・壱岐国で「兵庫」が鳴る怪異の出現⁴。

⇒「党」の活動と新羅海賊が西海道の情勢を不安定にさせるなかで、文武2年の「緒治」記事以来、約160年ぶりに鞠智城の史料が怪異記事として出現。

◎鞠智城の記事における「城」「兵庫」「鳴」という共通項

→新羅海賊の侵略が現実のものとなりつつある



状況において、鞠智城の「兵庫（鼓）」において「自鳴」という対外的危機を予兆する怪異が現れ、鞠智城が「城」と認識された。

⇒有明海の防衛は、9世紀後半の新羅海賊によって形成された認識。IV期以降、倉庫としての機能を充実させていた鞠智城が、V期に有明海の防衛のため「城」としての機能を再開させた。

▼鞠智城跡出土土器数の二つめの最盛期が9世紀第3・第4四半期（第1図）。

（2）十世紀の大宰府軍制と藤原純友の乱

- ・新羅海賊に対して大宰府は、「統領選士」は「懦弱」で「憚氣」があるとして、「俘囚」を動員⁵。
- ・元慶7年（883）、「群盜百許人」によって筑後守都朝臣御酉を殺害される
→大宰府司が犯人を「追討」できず、官符によって「譴責」されている⁶。
→大宰府は、現実の「党」を鎮圧する軍事力を持たなかった。

○藤原純友の乱

- ・〔下向井1989・小林1989〕：純友は承平段階では「海賊」を鎮圧する側であったにもかかわらず、天慶段階で国家的反乱を起こし鎮圧される側になった。

【史料4】『吏部王記』承平六年三月某日条

是日、伊与前據藤原純^{（共）}、聚^{（衆）}党向^{（伊与）}、留^{（連）}河尻掠内^{（内）}。

⇒海賊を鎮圧する側であった純友が「党」を組織。国家的反乱後も純友の武力となったのは、「前伊予掾」＝「秩満解任之人」として形成していた「党」にあった。

- ・大宰府追捕使左衛門尉相安等兵、為^ム賊被^ム打破^ム由^{（由）}⁷
- 空前の大反乱に際して、「大宰府追捕使」を設置したが、大宰府軍制はあまりにも無力。純友の攻撃によって大宰府は焼失する。

⇒古代山城の築城以来、大宰府の防衛を第一義としてきた国家にとって、大宰府消失という事態は前代未聞の大事件であり、西海道に相当な衝撃をもたらした。

（3）十世紀における國家軍制の転換

- ・大宰府を救ったのは、「山陽道追捕使」（長官：小野好古、次官：源經基、判官：藤原慶幸、主典：大蔵春実；『純友追討記』）
- ・純友を裏切った次将藤原恒利も讃岐介藤原國風の元に投降した後、好古率いる追捕使軍とともに大宰府で戦い、多くの「賊」を討ち取っている（『純友追討記』）。
- ・また、讃岐介藤原國風軍は「勇悍者」、追捕使軍は「武勇」を組織（『純友追討記』）。
- 「党」の武力を傘下に組織することで、「党」の武力を基盤とする純友軍に対抗。

○「党」を動員する法的根拠

【史料5】『本朝文粹』巻第二「官符」天慶3年（940）正月11日官符

太政官符 東海東山道諸国司

応^ム拔^ム有^ム殊功^ム輩^ム加^ム不次賞^ム事

右平將門、積惡弥長、宿暴暗成。猥招^ム烏合之群^ム、只宗^ム狼戾之事^ム。冤^ム國宰^ム而奪^ム印鑑^ム、領^ム縣邑^ム而事^ム抄掠^ム。輕狡之党、愚憲之徒、或欲^ム免^ム一朝之辱^ム、自赴^ム勤誘

⁵ 「類聚三代格」卷十八「夷俘并外蕃人事」貞觀11年（869）12月5日官符。

⁶ 「日本三代実録」元慶7年（883）7月19日条。

⁷ 「日本紀略」天慶3年（940）10月22日条。

之属、或擬、延、片時之命、多入、劫略之中。(中略)抑一天之下寧非、王土。九州之内、誰非、公民。官軍黠虜之間、豈無、憂、國之士、乎。田夫野叟之中、豈無、忘、身、之民、乎者。左大臣宣、奉、勅、宣、仰、國宰、若殺、魁帥、者、募以、朱紫之品、賜以、田地之賞、永及、子孫、伝、之不朽。又斬、次將、者、隨、其勳功、賜、官爵、者。諸國承知、依、宣行、之。普告、遐邇、令、知、此由、符到奉行。

天慶三年正月十一日

→将門の乱鎮圧のため東海東山道諸国司に対して発給。

・「官軍黠虜」の中の「憂、國之士」や「田夫野叟」の中の「忘、身之民」を組織。

・【史料5】十日前の正月1日には「東海東山山陽道等追捕使以下十五人」が補任されているが、結果として将門の乱を鎮圧したのは、藤原秀郷・平貞盛 = 「党」。

→【史料5】において組織が企図された軍事力こそ、「党」の武力。

一純友の乱で国司軍、追捕使軍が動員した「勇捍者」「武勇」も同官符を根拠に動員された軍事力であったのではないか。

・【史料5】の効力：天慶の乱の鎮圧で恩賞を得た藤原秀郷・平貞盛・源經基ら「兵」たちの官位が躍進し、貴族社会の中で地位が上昇、その武力が不可欠のものになり、「武士発生の起爆剤」となった〔川尻 2007〕。

○刀伊の入寇での大宰府軍

・大宰府軍の主力：前少監大藏朝臣種材以下のいわゆる「府官系武士」と文屋忠光・大宮守宮・財部弘延・源知といった「住人系武士」とから構成される「府無止武者」

→彼らの階層こそ「党」を組織した「秩満解任之人」「王臣子孫之徒」に他ならない。

◎【史料5】を契機として、大宰府軍も「党」の軍事力を組織。

⇒天慶の乱、特に西海道では純友の乱を画期として、十世紀中葉以降、大宰府軍制は「党」を組織した新たな軍制へと転換。実際の軍事的危機に対応しうる軍事力を常備。

新羅海賊の出現により再び「城」としての機能を再開したV期の鞠智城は、律令国家成立以来の根本的な国家軍制の転換のなかで次第に軍事的意義を失い、遂にその役目を終えた。

<参考文献> (副題は省略)

柿沼亮介 2014「朝鮮式山城の外交・防衛上の機能の比較研究からみた鞠智城」「鞠智城と古代社会」
二 熊本県教育委員会

川尻秋生 2007『平将門の乱』(戦争の日本史4) 吉川弘文館

木崎康弘 2014「『鞠智城遺地論』覚書」「鞠智城跡II-論考編2-」熊本県教育委員会

木村龍生 2014「鞠智城の役割に関する一考察」「鞠智城跡II-論考編1-」熊本県教育委員会

小林昌二 1989「藤原純友の乱再論」「日本歴史」499

坂本經堯 1937「鞠智城址に隕せらるる米原遺跡に就て」「肥後上代文化の研究」肥後上代文化研究所・肥後考古学会

下向井龍彦 1989「藤原純友の乱」再検討のための一史料」「日本歴史」495

長洋一 1991「鞠智城について」「都府樓」12

戸田芳実 1968「中世成立期の国家と農民」「初期中世社会史の研究」東京大学出版会 1991

戸田芳実 1975「九世紀東国庄園とその交通形態」「初期中世社会史の研究」東京大学出版会 1991

富田紘一 1979「熊本県(菊池地区)鞠智城119」磯村幸雄・阿蘇品保夫・森下功・三木靖編「日本城郭大系」(18 福岡・熊本・鹿児島)新人物往来社

能登原孝道 2014「菊池川中流域の古代集落と鞠智城」「鞠智城跡II-論考編1-」熊本県教育委員会

【論文要旨】

十世紀における国家軍制と鞠智城

野木雄大

9世紀から10世紀にかけて現れる「群盜」は、「秩滿解任之人」「王臣子孫之徒」などが「留住」を契機として組織した「党」による活動であった。「党」は、「院宮王臣家・諸司使」「浪人」「俘囚」「衛府舍人」「郡司」など様々な階層を包含し、「群盜」行動もそれを発生させる要因は多種多様であった。郡司を殺害するほどの武力を有した「党」は、当該期の中央國家が直面した軍事的危機であった。

このような状況下において、西海道では新羅海賊による有明海への侵攻が現実のものとなつた。このことにより、初めて有明海の防衛が意識され、鞠智城の機能が倉庫から再び「城」へと変化し、軍事的活動が再開された。

しかし、天慶の乱が勃発すると、既存の国家軍制では太刀打ちできず、中央は天慶3年正月11日官符によって反乱側の軍事力でもあった「党」の組織を試みる。これが功を奏し、「党」の軍事力によって天慶の乱は鎮圧され、同官符は乱の鎮圧者の系譜が「兵」の家として確立してゆく契機となった。政庁の焼失という前代未聞の事態を引き起こし、軍事力の転換を迫られた大宰府軍制も「党」に相当する人々を組織することで、刀伊の入寇をはじめとする軍事危機に対応していった。かかる10世紀の国家軍制の転換によって鞠智城の軍事的意義は失われ、300年続いたその長い歴史に幕を降ろしたのである。

(557字)

2017.3.11 第5回鞠智城跡「特別研究」成果報告会 於：くまもと県民交流館パレア

AR・VR技術を応用した鞠智城跡整備の一例 一城門遺構について—

行橋市教育委員会 山口 裕平

はじめに

遺跡整備についての考察 ⇒ 現在の鞠智城跡の整備（八角形建物などの復元整備）

1. AR・VR技術を応用した遺跡整備について

AR (Augmented Reality : 拡張現実感) と VR (Virtual Reality : 仮想現実感)

遺跡への導入事例 ⇒ 九州では鴻臚館跡・福岡城跡、肥前名護屋城、三重津海軍所跡

2. 鞠智城跡の城門の調査成果

(1) 深迫門跡

外郭線の南東方向に開く谷に、石製唐居敷（長者どんの的石）が知られていた

⇒ 1・3・16・28次の4次にわたる発掘調査を行っている

⇒ 谷を狭める内托式の版築土壁（高さ約4m）、裾部より築造時の支柱列（1.8m間隔）

登城道（一部に敷石、千鳥状に河原石を敷き詰めた土坑）

※城門跡（石製唐居敷の原位置）は確認されず

(2) 堀切門跡

外郭線の南側に開口する凝灰岩質の谷地に、端部を欠く石製唐居敷があった

⇒ 20・21・22・23次の4次にわたる発掘調査を行っている

⇒ 唐居敷のもう一端は近隣の木野神社に

※二石に左右の扉の軸槽穴を加工

発掘調査で唐居敷の原位置を確認（柱痕は直径60cm）

懸門構造（城門の前面に約1.2mの段差がある） ⇄ 平門構造

登城道、凝灰岩を削り出した2段構造の土壁を確認

(3) 池ノ尾門跡

外郭線の南西方向にあり、石製唐居敷が1石知られていた

⇒ 1・26・27・30・32次の5次にわたる発掘調査を行っている

⇒ 面的に調査が行われ、谷部を塞ぐ石壁を確認し、下部に暗渠式の通水溝を検出

城外側に盛土遺構

城門建物（唐居敷の原位置）は現在の市道部分にある可能性が高い

3. 城門構造の復元とAR画像の作成

AR画像（復元2D画像）は事務局提供の写真にAdobe社のIllustratorで加工

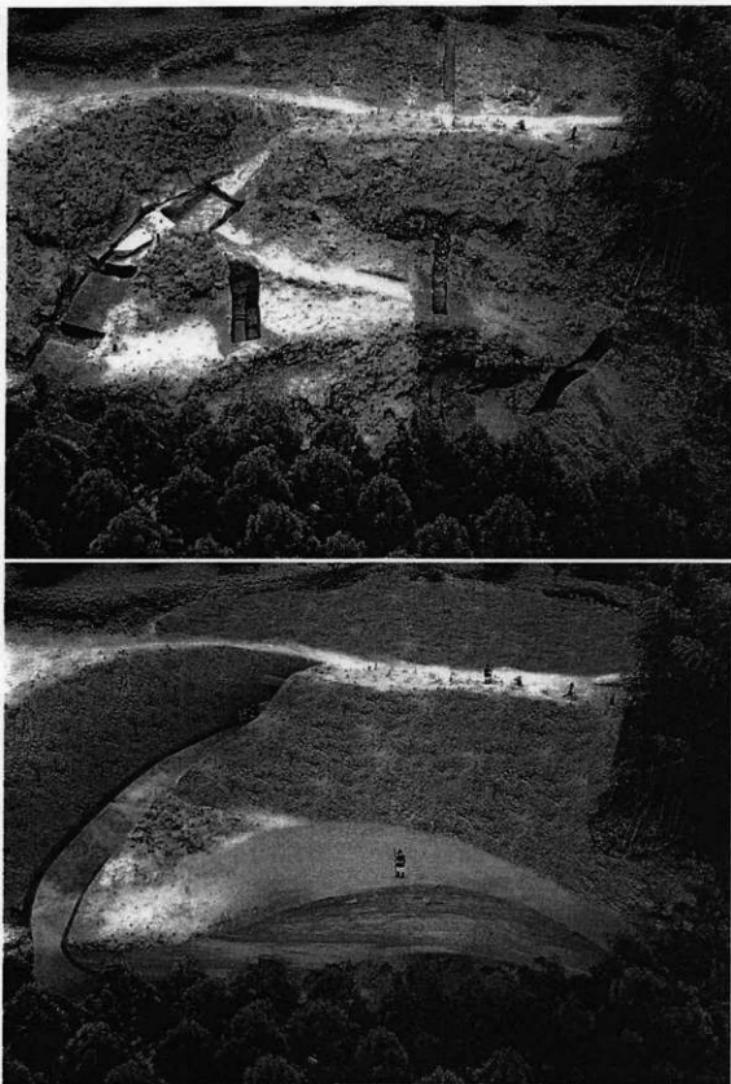
各城門のAR画像 ⇒ 第1図、第2図、第3図を参照

おわりに

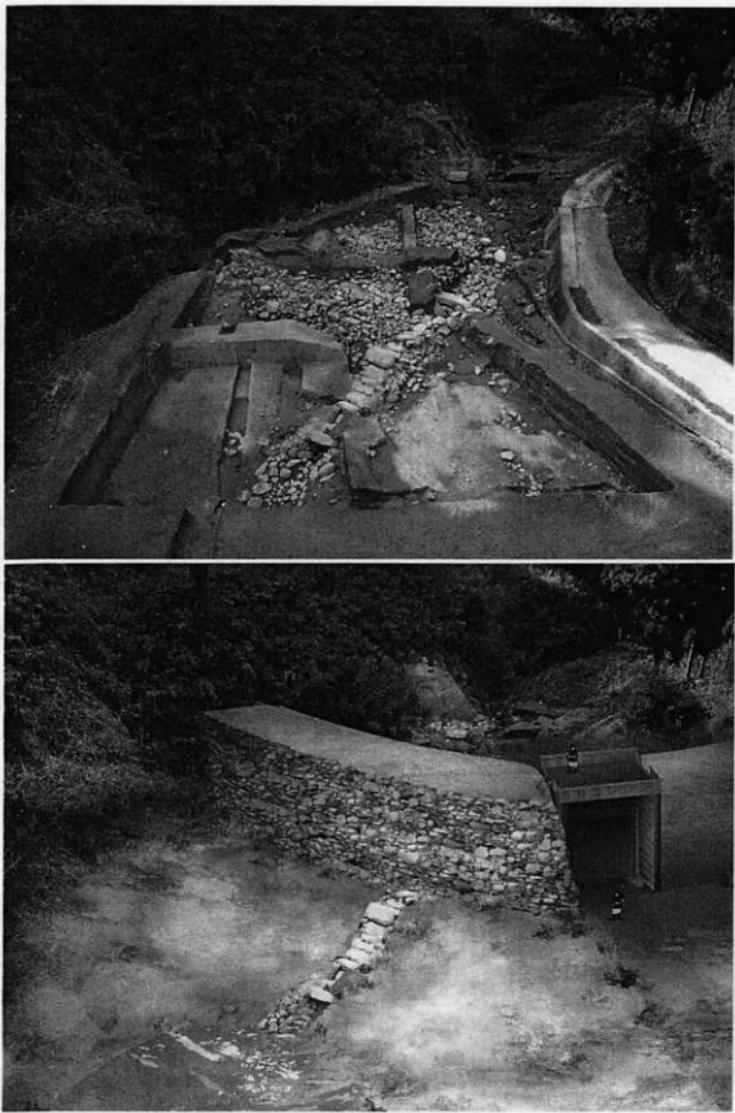
今後の遺跡整備のあり方について



第1図 深迫門跡（上：発掘調査時、下：AR画像）



第2図 堀切門跡（上：発掘調査時、下：AR 画像）



第3図 池ノ尾門跡（上：発掘調査時、下：AR 画像）

【論文要旨】

AR・VR 技術を応用した鞠智城跡整備の一例

—城門遺構について—

山口 裕平

国史跡鞠智城跡は現在、八角形鼓樓、米倉、兵舎、板倉の4棟の古代建物の復元整備を行っており、来訪者に日本の古代山城の具体的なイメージを提供している。その反面、復元整備は膨大な初期投資がかかり、建物を適切に維持管理していくことはコスト等の面からも難しく、今後は AR (Augmented Reality : 拡張現実感) ・ VR (Virtual Reality : 仮想現実感)などのデジタルコンテンツを用いた整備が盛んになることが予想される。

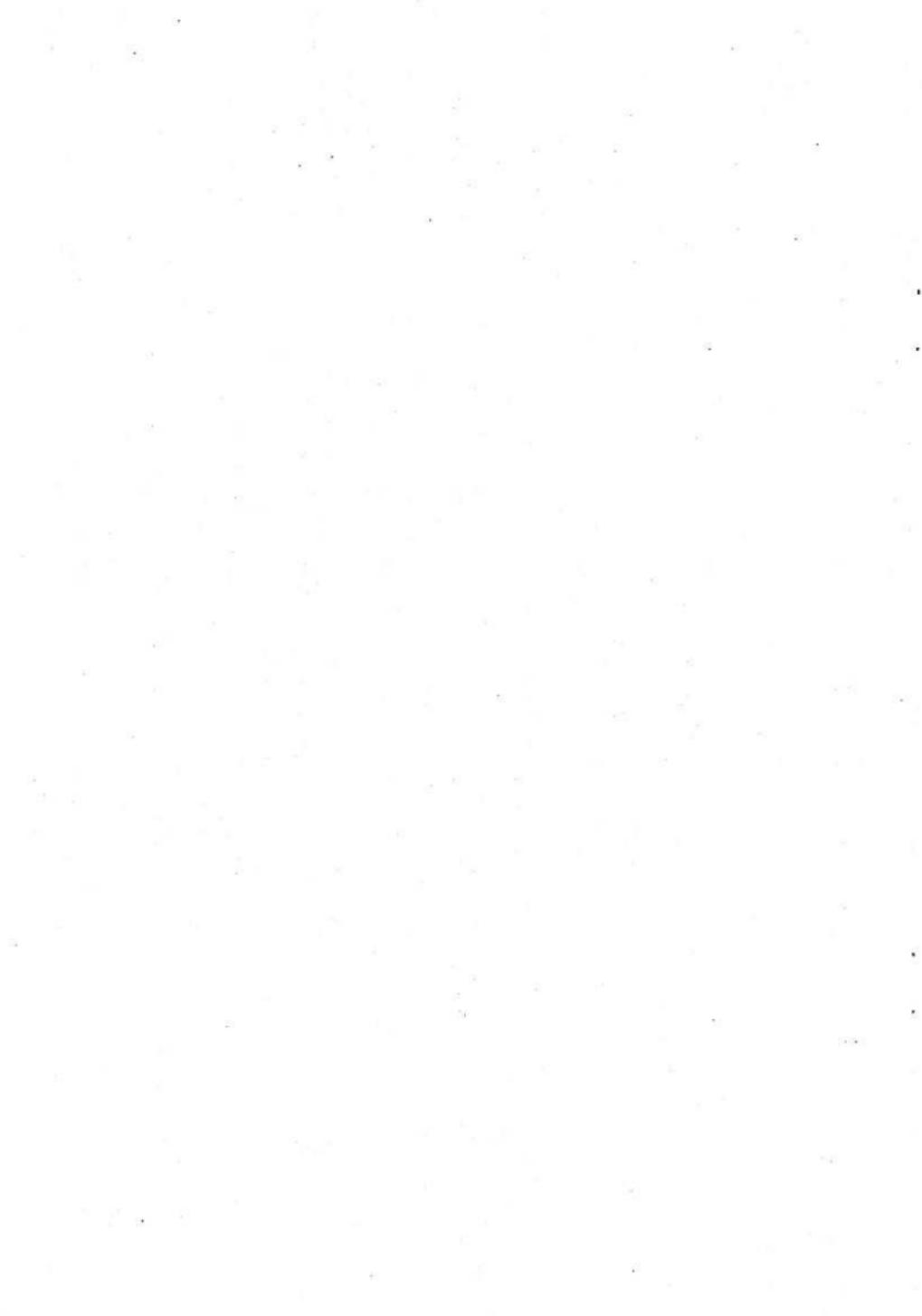
デジタルコンテンツを用いれば、遺跡に復元建物などハード整備を行っていない場合でも、遺跡の往時の様子を再現し、来訪者の追体験を可能とする。また、遺跡現地でのガイドナビゲーションとして、関連情報を文字や音声、画像や映像などで示すことで、遺跡を理解することを容易とする。例えば鞠智城跡の場合、イメージキャラクターである「こうう君」を映し出し、共に記念写真を撮影する等の遊びの要素を付加することで、身近に歴史と親しむ契機となる。ひいては来訪者の体験をより豊かにすることで新たな感動が生じ、それが遺跡の再訪へと繋がるサイクルを生み出す可能性も秘めている。一方、導入後のデジタルコンテンツの維持管理、ハード面での遺跡整備との関係をどうするかなど、検討課題も多い。さらに、絶えず進歩する技術革新の中、今後これらの技術やその利用が、どのような方向性を持つのかを見据えておくことも必要である。

こうした現状を踏まえ、本稿では AR・VR 技術を応用した鞠智城跡の遺跡整備について一考を行った。検討対象としたのは深迫門、堀切門、池ノ尾門の三箇所の城門遺構で、それぞれの復元例を AR 画像 (2D 画像) で示すことを目的とする。いずれの城門跡もすでに発掘調査を行っているが本格的な整備は未着手で、調査成果は三者三様の個性的な構造であることを示す。復元はその成果に基づき忠実に行つたが、建物の上部構造は、筆者に建築学の素養が浅く大雑把なものになった。遺構から上屋構造を復元するのは難しい課題であることを改めて痛感した。

以上本稿は、鞠智城跡で将来実施させるであろう AR・VR 技術を応用した整備の足掛かりになる研究として、第一義的な意味があるものと考える。

《 大 戎 》

《メモ》



律令国家の誕生と鞠智城

近江 傑秀

はじめに

(1) 古代山城築城の背景

古代山城は白村江の敗戦後の倭国が唐・新羅の連合軍の襲来に備え、国防のために築いたものであり、その築城技術は百濟の亡命渡来人によるものであったというが、通説的な理解である。そして、それは山城が九州北部と瀬戸内海沿岸に分布することや築城技術に類似性が認められることからも補強されている。

まずは、通説の根拠となっている『日本書紀』天智紀の記録を簡単に辿ってみたい。

白村江の戦いは天智2年(663)8月28日。そこで大敗を喫した倭国軍は9月24日に朝鮮半島から撤兵する。そして、翌年5月17日。唐の將軍の使者、郭務悰が倭国にやってくる。郭務悰の帰國は同年12月12日。この間に唐と倭国との間にどのようなやりとりがあったかは『日本書紀』は語らない。そのため、郭務悰到来の評価は研究者の中でも、ふたつに分かれている。

ひとつは、唐使の到来をもって、唐・新羅連合軍の倭国侵略の危機は去ったという見方であり、もうひとつはここから倭国にとって厳しい戦後交渉がスタートしたという見方である。どちらの見方をとるかによって、3年は年条に見える対馬と奄岐、筑紫に防人と烽を置き、水城を造ったという記事に始まる国防関係の施設建設や制度の整備に関する評価も多少異なってくるだろう。当面の危機が去った状態で立案された中長期的政策なのか、他国の侵攻という目的前に迫った非常事態への喫緊の対応のための政策なのか、という違いは、事業実施のスピードや計画の内容や熟度、労働力の編成等に反映されると考えられる。私は、後者の見方をとるが、その理由のひとつが、『日本書紀』持統4年(690)10月22日条に見える以下の記事である。

「乙丑に、軍丁筑後國の上陽畔郡の人大伴部博麻に詔して曰はく、「天豐財重日足姫天皇の七年に、百濟を救ふ役に、汝、唐の軍の為に虜にせられたり。天命開別天皇の三年に淮びて、土師連富杵・米蓮老・筑紫君蘿夜麻・弓削連元宝の児、四人、唐人の計る所を奏聞さむと患歎へども、衣糧無きに縁りて、達くこと能はざることを憂ふ。是に、博麻、土師富杵等に請りて曰はく、「我、汝と共に、本朝に還向かむとすれば、衣糧無きに縁りて、慎に去くこと能はず。願ふ、我が身を売りて、衣食に充てよ」といふ。富杵等、博麻が計の依に、天朝に通くこと得たり。汝、独他界に淹滯すること、今に三十年なり。朕、麻の朝を尊び國を愛ひて、己を賣りて忠を頭すことを嘉ぶ。」

この記事は、持統4年に唐から帰国した大伴部博麻を賞したものである。博麻は白村江の戦いで土師連富杵らとともに虜になり唐に連行された。天智3年に唐が倭国侵略を計画することを知った彼らは、そのことを倭国に知らせようとした。しかし、倭国に戻る旅費がなかった。その時、博麻が自ら進んでその身を売り、その代金を富杵らの帰国旅費に

あてたというのである。この記事は「愛國」という言葉が最初に使われ記事としても著名であるが、何よりも天智3年には実際に、唐による倭国侵攻計画があり、そのことが捕虜として唐にいた者たちの耳にも入るほど具体化していたことを物語る。

こうした緊張に対応するためか、天智4年8月には、百済の渡来人を遣わし長門国と筑紫国大野城、櫟城を造らせたとある。古代山城築城の最初の記事である。そして、9月23日には唐より劉德高がやってきて、戦後交渉を行ったようであるが、劉德高滞在中に宇治で大がかりな聞兵式を行うなど、倭国側も和戦双方にらんだ駆け引きを行っているようである。またこの年には倭国も、守君大石を唐に遣わしている。

5年(666)には、唐・新羅連合軍が高句麗征討のための軍を発したためか、国防に関する記事はみえないが、6年には再び、情勢は慌ただしくなる。3月19日には近江大津への遷都、11月には、大和国に高安城、讃岐国に屋島城、対馬国に金田城を築城したとあり、いよいよ唐・新羅軍が来襲かと思われたが、7年になると状況は一変する。

まず正月に、天智天皇がようやく即位し、9月12日には新羅使が実に齊明2年(656)以来、12年ぶりにやってくる。この頃、唐と新羅との関係は悪化しつつあった。高句麗は唐・新羅連合軍により、この年の10月に滅亡するが、新羅は669年には高句麗の遺臣を蜂起させ、唐の旧高句麗領統治を脅かし、670年には新羅軍は唐の熊津都督府を襲撃するなど、朝鮮半島から唐の勢力を驅逐し、朝鮮半島の統一に向けて動き出した。

これら一連の出来事から考えると、7年9月の新羅からの使者は、唐からの朝鮮半島独立を図るために、倭国との関係を改善しようとするものだったと考えられる。いずれにせよ、この新羅からの使者は、倭国が最も恐れた唐・新羅連合軍来襲の危機が著しく遠ざかったことを示している。「天智紀」には、これ以降も築城記事が見られるが、これは『日本書紀』編纂時のミスによる重出記事と考えられており、白村江敗戦後の危機は、天智7年頃にはひとまず去っていたと考えられる。

なお、天智10年には、次の記事がみえる。

『日本書紀』天智10年11月10日条

十一月の甲午の朔癸卯に、対馬国司、使を筑紫大宰府に遣して言さく、「月生ちて二日に、沙門道久・筑紫宮薩夜麻・韓嶋勝娶婆・布節首蕃、四人、唐より來たりて曰さく、『唐国の使人郭務捺等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、總合べて二千人、船四十七隻に乗りて、慎に比知崎に泊りて、相謂りて曰はく、今吾輩が人船、數多し。忽然に後に到らば、恐るらくは彼の防人、驚き駆みて射殺はむといふ。乃ち道久等を遣して、預め精に來朝る意を披き陳さしむ』とまうす」とまうす。とまうす。

この時、唐が総勢2000人にも及ぶ大使節団を送るが、この使節が防人の攻撃を受けないよう、あらかじめ沙門道久らを使員として倭国訪問の目的を伝えさせたとある。この記事は、唐が倭国に対する侵攻は取りやめたことを示していると思われる反面、倭国側では未だ緊張感が漂っていたことを示すと考えられる。

こうした一連の記事から、古代山城の築城のひとつのピークは唐の侵攻が現実のものとして認識されていた天智7年頃までと考えられるが、その後も唐に対する緊張関係はしばらく続いており、国防のための施設の建設や制度の整備は引き続き行われたと思われる。

(2) 古代山城からみえる防御網

古代山城には、

- ①「天智紀」に築城記事が見えるもの
- ②それ以後に修復・廃止記事が見えるもの
- ③史料に見えないもの

の三者がある。①には、長門城、大野城、櫛城（基肆城）、高安城、屋島城、金田城の6城、②には、鞠智城（文武2年（698）に修理）、三野城・稻積城（文武3年（699）に修理、所在地不明）、常城・茨城（養老3年（719）に廃止）があり、③は16城確認されている。

図で示したとおり、これらは九州北部、瀬戸内地域に点在していることが分かるが、これに古代の駅路や主要な港湾を加えてみると、それぞれの山城が陸路と水路とによって密接に結びついており、それらが防衛システムを形作っているように見える。

特に、瀬戸内地域の山城は、その傾向が明確に認められ、中国地域においては石城山城を除くと、駅路に近接した場所、しかも、後に国府が置かれる場所に近接する傾向を示す。四国地域でも似たような傾向を示すが、中国地方よりも港湾との関係がより明瞭に認められる。つまり、海路と陸路をそれぞれ拒するような形で分布しているのである。

1. 問題の所在

(1) 古代山城全般に対する理解について

ここまで述べてきたように、『日本書紀』にみえる白村江の敗戦以降の国防に関する諸施策と、古代山城の分布と古代道路の在り方は一見して強い関連性が認められるよう思える。つまり「天智天皇は国防のために山城を造り、道路網を整備した」という見方ができる、それは必ずしも同一時期に造られたとは断定できない（築城時期の差）ものの、一連の政策に基づき、企画・施工されたようと思える。

もちろん、これはあくまでも大ざっぱな理解であって、史学的とはいわゆる神護石系山城が朝鮮式山城に先行して齊明朝以前に造られたという見方や、それとは逆に神護石系山城は白村江の敗戦以降に造られた朝鮮式山城に後出するという見方もある。また、築城目的も、すべてを唐・新羅連合軍の侵攻に備えたものとする見方もあれば、軍事的な機能は認めるものの、地方支配の拠点としての性格を想定するものもある。

さらに、個々の古代山城の調査の進展により、山城ごとの築城時期や目的についての検討も進められており、すべての古代山城一律に捉えることに対して疑問視する見方も強まっている。しかし、奈良時代以降に修理の記事がみえる大野城、基肆城、鞠智城を除くと、その存続時期はせいぜい50年程度と短く（古代山城の廃止については、養老3年（719）に常城・茨城の廃止記事がみえることが参考になる）、奈良時代前半には役割を終えていることからすれば、少なくとも律令制確立以前に、何らかの目的で計画的に造られた一群であり、高所に立地し石垣や土塁を有するなど、軍事的性格を強く持っていたことは指摘できよう。そして、その契機を白村江の敗戦に求める見方は、依然として強い影響力を持っているのである。

(2) 今回、問題として取りあげる点

古代山城の研究は長い歴史があり、先学諸氏によりさまざまな見解が述べられている。ここで、それらの研究をすべて咀嚼し、何らかの見解を述べるには、私自身、現地調査を行い、さまざまな観点から分析を行わなければならないが、残念ながらまだその域には到達していない。従って今回は私が古代山城に対して漠然と疑問として抱いている問題をいくつか挙げ、それらについて私見を述べたいと思う。あくまでも机上での検討であるため、「空論」に陥る可能性もあるが、問題点の整理という意味もあるかと思うので、批判を恐れず大胆に話を進めたい。私が問題とする点は、以下のとおりである。

- ①古代山城築城の契機
- ②古代山城は交通の要衝に位置しているのか
- ③古代山城の築城目的は何か

①は、白村江の敗戦が築城の契機になったという見方に対する疑問である。先述のように『日本書紀』では天智4年8月の長門国と筑紫国大野城、様城築城が古代山城築城の初見である。前年の水城築造の記事も併せ、あたかも白村江以後の緊張した国際関係の中で築城されたようにみられる。

ただ、この年が古代山城の完成年なのか着工年なのかは、明示されていない。天平勝宝8年(756)に築城が開始された怡土城の完成は神護景雲2年(768)であり、完成に13年を要している。これを単純にあてはめると、天智4年(665)を完成年とすると、着工は白雉3年(652)であり、孝德朝に遡ることになる。逆に着手年とすると、完成年は天武7年(678)となる。もちろん、唐の侵攻という直面する危機への対応という意味で造られた山城であると考えられるので、施工期間も大幅に短縮されたであろうが、それでも白村江敗戦後に着手して、その翌年には完成したというのは現実的にはあり得ず、天智4年完成とみるならば、その着手時期は齊明朝にさかのぼると考えるのが妥当だろう。

②は主に駅路との関係についてである。古代山城が駅路に近接して立地する傾向が認められることから、駅路も古代山城と一緒に国防のために整備されたという見方がある。逆に、古代山城と駅路との関係性を認めることにより、駅路の敷設を7世紀第3四半とするという見方もある。しかしながら、道路遺構は遺物が出土することが稀であるため、考古学的に時期を特定できていないというのが実情であり、敷設時期についても天智朝説と天武朝説とがある。つまり、古代山城と駅路との一体性とは、考古学的な検証を経て得られた結論ではなく、あくまでも仮説のひとつに過ぎないのである。現在、復元されている古代駅路の敷設時期を明らかにすることは、古代山城の立地を考える上で重要であるので、この点を問題としたい。

③については、古代山城の編年と深く関わる。①②の検討結果や古代山城の立地などを含めて検討し、その敷設目的について推察する。

2. 古代山城築城の契機

(1) 築城に関する史料

『日本書紀』天智4年(665)8月条には、
秋8月に、達率答■春初に遣して城を長門國に築かしむ。達率億禮福留・達率四比福夫を
筑紫國に遣して大野及び様、二城を築かしむ。

とある。ここにみえる3名のうち憶禮福留の名は、『日本書紀』天智2年9月25日条に見え、この日に朝鮮半島の豆礼城から倭国に向かった人物の中のひとりであったことが知られる。白村江敗戦とともに倭国に渡った旧百济の軍人の一人と考えられる。

天智2年に百济にいた人物が築城の指揮を行っていることからすると、大野城ほか2城は、天智4年に築城が開始されたと考えるのが妥当である。しかし、大野城の築城はこの記事よりもさかのぼる可能性が出てきた。大野城大宰府口門から出土した木柱を年輪年代測定したところ、その伐採年は648年を示していたのである。

もちろん、柱として用いられた木の伐採年が築城の年を示しているとは限らない。他の施設で用いられていた材を大野城築城に伴い再利用した可能性もあるし、あらかじめ伐採してストックとして材を用いた可能性もあるからである。ただし、それと同じ理屈で大野城の建設が648年に着手されたことを完全に否定することもできないのであり、『日本書紀』の記載のみを持って、天智4年築城開始と断じるわけにはいかないと考える。

それというのも、後の古代山城に通じるかどうかは別にして、齊明朝には石壘を持った山上の施設が既に倭国でも造られていたからである。

(2) 気になる両櫛宮

『日本書紀』齊明天皇2年(656)是歲条には、以下の記事が見える。

由身嶺に冠らしむるに周れる垣を以てす。田身は山の名なり。此をば大務と云ふ。後、嶺の上に両つの櫛の樹の辺に、籠を起つ。号けて両櫛宮とす。亦は天宮と曰ふ。時に莫事を好む。道ち水工をして渠穿らしむ。番山の西より、石上山に至る。舟二百隻を以って、石上山の石を載みて、流の頭に控引き、宮の東の山に石を累ねて垣とす。時の人の誇りて、日はく、「狂心の築。効笑を損し費すこと、三万余。垣造る功夫を費し損すこと、七万余。宮材彌れ、山根埋れたり」といふ。又、誇りて曰く、「石の山丘を作る。作る隨に自づからに破れなむ」といふ。若しは未だ成らざる時に撲りて、此の誇を作せるか。

ここに現れる両櫛宮と考えられる遺跡が明日香村に所在する酒船石遺跡である。酒船石があり丘陵全体に版築による盛り土をした後にテラス状にカットし、テラス面に石英閃緑岩の列石の上に天理砂岩と呼ばれる砂岩の切石を7~8段積んでいたと考えられている。石列は、直線と折れを基本としており、その点は古代山城の列石と共通する。

両櫛宮の性格はよく分からぬ。ただし、この前後に齊明天皇は瓦葺きの宮殿を小墾田に造ろうとしたり、飛鳥を莊厳化するためか盛んに土木工事を行っている。両櫛宮の造営もこうした首都整備ともいうべき工事の一貫であり、また山麓で発見された亀型石造物の存在から、祭祀的な意味を持っていてと評価される場合もある。

しかし、山麓の亀型石造物の石壘とは一体であったとする見方は両者が近接しているということと、使用石材の共通性から時期も同時とみられることを根拠とするもので、この二つが一体的なものである根拠は十分に説明されているとは言いがたい。むしろ、両櫛宮の造営の直前に両櫛宮の南西山麓にあたる場所に、後岡本宮に定めていることを重視すれば、平地の宮を睥睨する山地に石壘を伴う大規模な施設が造られたということを評価すべきだろう。

これは、後述するように大野城・基跡城と大宰府、高良山城と筑後国府、御所ヶ谷城と豊前国府、讃岐城山城と讃岐国府、鬼ノ城と備中国府といったように、古代山城が後に国府が置かれる平野部を見下ろす位置に立地する場合があることと共通する。もちろん、国府は古代山城の築城後、時をおいて整備されたものであるので、両櫛宮と後岡本宮と同様の例として取り扱う訳にはいかないのだが、国府の多くがそれぞれの地域の拠点となる場所に設置される傾向が認められることや、後述するように讃岐国府下層から国府に先行する官衙と考えられる掘立柱建物群が検出されていることから考えると、山地の施設が平地と何等かの関連性をもって造られているという点では類似しているといえよう。

さらに百濟救援も齊明朝から開始されたことも注意を要する。齊明6年（4年条）には百濟の遣臣が唐・新羅連合軍による滅亡を告げている。倭国から唐や新羅への使者も派遣されるなど、対外関係が急速に緊張へと向かった時期であった。こうした記事から類推すると齊明朝に国防のための施設の建設が開始された可能性も考えられるのである。

（3）天智朝以前に築城が開始された可能性

古代山城の築城の契機は、対外関係の緊張によると考えられるが、ただその開始時期は白村江の敗戦によるのではなく、百濟救援軍派兵以前に開始された可能性は必ずしも否定できないだろう。また、山地で大規模な造成工事を行い、石列を有する施設を造ったのは、古代山城以前の両櫛宮にまで遡ることは確実であり、しかも平地に重要施設が存在すること、版築工法を用いること、石列に折れを有することなどは古代山城とも共通するところである。

両櫛宮の造営目的がはっきりしないという問題はあるものの、ひとつの可能性として齊明朝には都である飛鳥と同じようなコンセプトで山上の施設と平地の施設、すなわち飛鳥における後岡本宮と両櫛宮、九州における大宰府と大野城・基跡城が計画され、着工された可能性もある。そして、こうした施設を土台として、白村江敗戦後に亡命渡来人の技術者により、百濟の山城と類似した山城として整備が継続された可能性も考えられるのでは無かろうか。

ちなみに両櫛宮は齊明2年に着工され、齊明朝のうちに完成したと考えられる。その場合の造営期間は長くとも6年。都で行われた事業とはいえ、極めて短期間に大規模な土木工事を完成させていたことが分かる。

3. 古代山城は交通の要衝に位置しているのか

（1）情報伝達速度から駅路敷設時期を考える

古代山城は交通の要衝に分布する傾向があると言われる。この交通の要衝とは、山陽道・南海道・西海道駿路と港湾である。このことは、暗に駿路と古代山城の一体性を指摘しているものとも言え、七道駿路そのものの敷設を天智天皇による国防政策の一環とする見方もある。

繰り返しになるが、駿路の敷設時期は考古学的には結論をみていない。駿路については、いわゆる改修の詔にみえるなど、その制度は早くに成立していたと考えられるが、発掘調査でみつかる幅広で直線的な道路の敷設時期は判然としないのである。これは、駿路はその敷設時期を示した史料がなく、また考古学的にも、道路が通常、廃棄の場とならないた

め敷設時期を示す遺物がほとんど出土しないためである。今回は、古代山城とも関連性が強いとされる直線的な駅路の敷設時期について、情報伝達速度という観点からアプローチすることとする。

飛鳥時代から奈良時代の情報伝達に係る記事を見ると、天武朝までとそれ以後とでは、伝達速度が異なっていることがわかり、そこに直線道路の敷設を含む緊急通信制度の成立時期を読み取ることができる可能性がある。表1は文武朝以降の新羅から使者に関する記事から所用日数等を割り出したものである。

これらは、あくまでも外交使節に限ったものであるが、非常事態の場合は大宰府～平城京の所用時間は5日であったことが『続日本紀』の記載から知られている。また、表で示した外交使節の到来を告げる使者は、通常、大宰府と平城京間を8～9日要していた。そして、使節到着の情報を得た都では、使節を都へ迎えるか否かの審議が行われ、出迎えの使者発出までの間に5日程度、要していた。つまり、大宰府に使者が到着すると、8～9日かけて情報が都に届けられ、その後、使節の対応に対する審議や出迎えの準備に5日、都から使節への対応を命じる使者が8～9日かけて大宰府へ向かうので、使者到着から対応決定の使者が大宰府に到着するまで、21～23日要していたのが一般的であった。

こうした情報伝達速度は律令という制度だけでなく、まっすぐな道路と駅家という緊急通信のために用いられるハードの影響を強く受けていると考えられる。すなわち、奈良時代と同様の速度で情報が伝達されるようになった時期が、制度とハードがともにそろった時期ということとなると考えられる。

では、天智～持統朝の外交記事をみてみよう。天智4年9月22日に筑紫から天皇に対する上奏文を送った唐からの使者を讐応したのは11月13日。唐使は入京した形跡が認められないことから、この讐応も筑紫で行われたと考えられる。つまり、9月22日～11月13日の52日の間には、筑紫から都への使者の往復と、都での審議、讐応の準備期間が含まれていると考えられる。戦後処理の重要な使者であるにも関わらず、律令制成立後の倍の日数を要している。

●天智4年（665）9月庚午朔壬辰（23日）。唐國遣朝敵大夫沂州司馬馬上柱國劉德高等
（等謂右戎衛郎將上柱國。百濟將軍朝敵大夫上柱國郭務悰。凡254人。7月28日至于對馬。9月20日至于筑紫。22日進表函焉。）

●天智4年（665）11月己巳朔辛巳（13日）。讐賜劉德高等。

●天智4年（665）12月戊戌朔辛亥（14日）。賜物於劉德高等。

●天智4年（665）12月是月。劉德高等罷歸。

また、天武2年閏6月15日に筑紫に到着した新羅からの使者に対し入京を認めたのは8月25日である。このほかにも天武朝には新羅などの外国使節の記事が多く認められるが、使者到着から次のリアクションが認められるまでは短くとも2ヶ月、長いと半年近くを要している。

これは、その時々の状況において使者への対応に大きな差があったことを示しているが、総じて情報伝達の速度そのものが奈良時代よりも遅かった、つまり、天武朝前半までは奈良時代のような緊急通信制度が確立していないかったと考えられる。ちなみに、当時の海路での難波～大宰府間の移動速度は片道約1ヶ月であり、このことを考えると天武朝における外交使節到来の連絡はもっぱら海路を用いていたのかもしれない。

それが持統朝になると、期間が大幅に短縮される。持統2年（687）8月25日の耽羅からの使者は9月23日には筑紫で饗應されており、3年4月20日の新羅からの使者は5月22日に筑紫で饗應され、4年9月23日の使者も10月15日には饗應を受けている。いずれの使者も一ヶ月弱で都への往復と、使者の扱いに関する審議がなされていることが分かり、その速度は大宝律令以降とほぼ同様である。

●持統2年（688）8月辛亥（25日）。耽羅王遣佐平加羅來獻方物。

●持統2年（688）9月戊寅（27日）。寅。饗耽羅佐平加羅等於筑紫館。賜物各有差。

このような急速なスピードアップは制度だけの問題ではなく、少なくとも山陽道駅路と駅家が整備されたことを示していると考えられ、山陽道駅路の整備は天武末年である可能性が浮上する。つまり、直線的な駅路は古代山城の多くが成立したとされる天智朝よりも遅れることとなる。

（2）古代山城と駅路との関係

駅路の敷設が天武末年とするならば、駅路と関連性が指摘される古代山城について、以下の想定が成り立つ。

- a　古代山城そのものが天武朝に駅路と一体のものとして築城された。
- b　古代山城築城後に駅路が敷設された。
- c　駅路敷設以前の伝統的な道路網を意識して古代山城が敷設され、その後、道路網が駅路として整備された。

aの場合は、古代山城の中には白村江の敗戦後の緊張關係が解消された後に築城されたものがあるということになる。b・cの場合は、天武朝末年においても、古代山城は重要な施設として認識されており、これを基軸として道路網が敷設されたということになるかも知れない。

また、天武朝以前における大宰府と都との連絡は、その所用日数からして海路が重視されていた可能性がある。その場合、古代山城と交通を考えるにあたっても、山城築城以後に整備された可能性がある駅路との関係ではなく、むしろ港湾との関係に注意を払わなければならないだろう。

いずれにせよ、古代山城と駅路との関係については、単純ではなく、古代山城個々の築城時期の検討を含めて、再検討しなければならないだろう。

（3）古代山城の編年

繰り返しになるが、『日本書紀』をみる限り、国防意識が急速に高まっただのは天智朝であり、新羅使が来た天智7年を境に緊張は解消へと向かっていく。こうした史料から知られる当時の情勢を考えると、古代山城も天智7年までの間に計画され、順次、築城されていったと考えるのが最も理解しやすい。しかし、考古学的には築城時期は必ずしも確定されておらず、一方で古代山城の中にも時期差と考えられる構造上の違いが指摘されている。

稻田孝司氏は古代山城の外郭線の形状と門の構造などから、以下のことを示した。

①築城年代の上限は664年を過らず、築城停止は藤原遷都（694）以前であること。

②築城時期は大きく3段階に区分でき、第1段階は金田城、大野城、屋島城（基肄城・高安城は未確定）、第2段階は鞠智城、鬼ノ城、讃岐城山城、阿志岐山城、雷山城、

御所ヶ谷城、高良山城、石城山城、第3段階は大廻小廻城、永納山城、女山城、把木城、おつぼ山城、帶隈山城、鹿毛馬城、唐原城である。

③古代山城に強い企画性が認められるようになるのは第2段階からであり、天武朝初年頃に下る可能性が考えられる。

稻田氏の指摘によれば、大半の古代山城は天武朝の築城となり、従前の理解に大きく見直しを迫ることになる。稻田氏は天武による古代山城の築城を、壬申の乱という軍事行動により政権を得た天武天皇が、前政権の軍事政策を継承することにより、政権の正当性を主張するとともに、新たな軍事理念を盛り込む狙いもあったと想定している。

(4) 古代山城と交通路

ここでは、稻田氏の編年に基づき、時期ごとに古代山城と交通路との関係についてみていただきたい。

まず第1段階の山城の立地を見ていく。大野城・基肄城は大宰府を見下ろす高所に立地し、大宰府との強い関連性が認められる。一方、金田城と屋島城は海に突き出た山上の高所に立地している。その立地は、明らかに海路を意識している。

わずか2例であるため、このような立地が第1段階の古代山城の特徴として挙げられるかどうかは、所在が確認されていない長門城の実態が解明された後に、改めて検討する必要があるが、第2段階以降の古代山城にこのような立地の山城が含まれていないことを考えれば、初期の古代山城の立地の特徴と言えるかもしれない。

次に第2段階の山城であるが第1段階に見られたように、海に突き出した山地に立地するものは基本的にはなく、やや内陸に入り込んだ場所に立地する傾向がみられ、その一方で重要な港湾に近接し、さらに後に国府が置かれる地方拠点に近接するものも立つ。

その典型的な例は、讃岐城山城である。讃岐城山城の東麓は讃岐国府が置かれる場所にあたり、近年の発掘調査では国府に先行かる官衙と考えられる7世紀後半の正方位を指向する掘立柱建物跡が複数検出されている。また、讃岐国府は国府津である松山津から約4km内陸にあるが、国府と国府津は直線道路で結ばれており、国府の南には南海道駅路が通過すると想定されている。松山津は『昔家文草』の記載から、明石と航路で結ばれていると考えられ、南海道の重要な港湾のひとつであったと考えられる。

御所ヶ谷城も讃岐城山城とよく似た立地条件にある。初期の豊前国府である福原長者原遺跡とは約6km、草野津とは約10kmの距離にあるが、大宰府から豊前へ向かう道路が平野に降りた付近に立地するなど、地方拠点、重要港湾、道路とを意識して立地しているようと思われる。また、少なくとも奈良時代前半まで大宰府と平城京との往来には、草野津から瀬戸内海の海上ルートを利用していたことが、『万葉集』から知られるなど、大宰府～草野津～難波～平城京というルートの重要性がうかがわれる。

高良山城は、7世紀末には成立した可能性が指摘される最も古い国府のひとつである筑後国府を見下ろす山地に立地（7世紀中頃にさかのぼる前身官衙も確認）し、その直下を西海道が通るとともに筑後川が流れるなど、やはり地方拠点、道路との関係が見て取れる。

石城山城は、平野部との関係は不明であるが、天平8年（736）の遣新羅使が寄港した熊毛浦と駅路との中間地点に位置し、やはり海路と陸路とを意識していることが分かる。

一方、鬼ノ城は後に備中国府が置かれる平野を見下ろしており、吉備の中海からもさほど離れていないことから、ここまで見てきた古代山城と類似するようにもみえるが、備中国府津は吉備中山付近と推定され、そこからは約14km離れている。また、国府が置かれる平野の背後に立地するなどこれまで見てきた事例とは異なり、港湾を意識しているとは必ずしも断定できない。雷山城・鞠智城も同様で、平地の遺跡や交通路との関係ははっきりしない。

なお、阿志岐山城については第1段階の大野城・基肆城とともに大宰府を取り囲む古代山城のひとつであり、近年ではこれら3つの城を取り囲む土壘の存在も指摘されている（前畠遺跡）。

以上のように、いくつかの例外はあるものの第2段階の特徴として

- ①重要な港湾付近のやや内陸部に立地するものがあること。
- ②後に国府が置かれる地域の拠点付近に立地すること。
- ③比較的、高所に立地すること。

の3つのいずれも、あるいはいずれかに該当するものが多く、その在り方第1段階とは異なっている。こうした違いは築城の目的そのものに関わる可能性もあり、特に陸路を意識し出すようになることや、平地の施設と一体性をもって機能したと考えられるものが現れることなどは、注目すべき点である。また、稻田氏が指摘するように、この時期から古代山城の規格化が進むことも意識しておく必要があろう。

第3段階の古代山城は、第2段階から大きく変化する。まずは、立地する場所の標高が200m以下と低くなる傾向がみられる。また、港湾との関係が指摘できるのは、分間津からやや内陸に位置する唐原城のみであり（永納山城は海に面するもの、史料に現れる港湾は付近には認められない）、その他は概して内陸に立地し、付近を直線駅路が通過するものが目立つ。大廻小廻城、女山城、把木城、おつば山城、帯隈山城、唐原城、永納山城がこれに該当する。また、第2段階にみられた地域拠点に近接するという傾向も基本的には認められない。さらに、女山城、おつば山城、帯隈山城は、第2段階の高良山城を加えて、有明海を取り囲むように立地しており、把木城、鹿毛馬城、唐原城は、第2段階の御所が谷城を加えて、瀬戸内側から大宰府へ向かうルートを扼しているようにもみえる。

つまり、第2段階の古代山城が平地の遺跡や港湾との関連性が強く認められるのに対し、第3段階の山城はそうした関係は希薄である反面、駅路と密接に関わり、それをつうじて他の山城と連結し、ネットワークを形成しているようにも思える。

（5）交通路からみた古代山城の築城時期

ここまで見てきたように、古代山城の立地にはさまざまな特徴があり、その立地の傾向は稻田氏による時期区分と概ね合致する。単純にそれをまとめると、

- ①第1段階 大宰府の周囲もしくは、海路を強く意識する段階
- ②第2段階 港湾と陸路、地域の拠点となる平野部を強く意識する段階
- ③第3段階 直線的な駅路を意識する段階

ということになろう。第1段階は『日本書紀』に見られるように、天智朝前半前に築城が開始されたと考えられ、第3段階については直線的な駅路の敷設が、先にみたように天武後半であると考えられるので、第3段階の古代山城の築城年代もそれ以降である可能

性がある。そして、養老3年(719)には、常城・茨城が廃止されていることからすると、この頃には古代山城の築城そのものが停止されていたと考えられる。

第2段階については、陸路も意識していることを考えれば、天武後半である可能性はあるものの、駅路以前に駅制が施行されていたことが知られるので、直線的な駅路敷設以前の陸路を意識した可能性もあるため断定はではない。ただし、平地の施設との関係性が認められるということを重視するならば、高良山城の麓にある筑後国府や讃岐城山城の麓にある讃岐国府前身遺構の成立時期である7世紀後半に整備された可能性が考えられる。そして、第2段階以降の古代山城に見られる規格性は、第1段階のように城ごとに技術者を派遣して築城させたのではなく、中央で古代山城の仕様書のようなものが作られ、それに基づき、各地方で築城されたと考えられる。

4. 古代山城の築城目的は何か

(1) 第1・2段階の山城

古代山城は対外的な緊張関係に対応して築城が開始されたということは異論がないところであろう。第1段階の山城の築城は朝鮮半島の混亂が契機となったことは疑いなく、白村江の敗戦を受けて、百濟からの亡命渡来軍人の指示のもと築城（前身となる城が存在した可能性もある）されたという理解でよいと考える。そして、その目的はあくまでも国防であったと考えられる。

では第2段階の古代山城はどうだろうか。第2段階の古代山城は、先述のように水陸交通路を強く意識するとともに、後に国府が置かれる平地との関連性も深い。軍事的な機能は当然、認めるべきものであるが、軍事のみではなく地方支配の拠点として、平地の官衙と一体のものとして機能したと考えられるものも含まれる。

こうしたことから第2段階の古代山城は、中央による地方支配システムの整備とも関係する可能性がある。『大宝律令』以前の地方支配は、国一評一五十戸という行政単位で行われていたことが知られるが、こうした地方行政単位が整備されたことが分かる最古の木簡が、明日香村の石神遺跡か出土している。

（表）乙丑年十二月三野國ム下評

（裏）大山五十戸造ム下ア知ツ

從人田ア児安

乙丑年とは天智4年(665)と考えられ、ムは「牟」、アは「部」、ツは「津」の略字なので、表面には665年美濃国牟下(武義)郡、裏面には大山五十戸造(大山サトの代表者)である牟下部知津という人名、田部児安という人名が書かれていることが分かる。木簡の上下に切り込みがあることからこの木簡は荷札木簡と考えられ、大山五十戸から都へ送られた荷に付けられていたことが分かる。

また、地方支配のための官衙の多くは天武末年に成立するが、一部に孝徳～天智朝に成立したと考えられるものもある。宮城県仙台市郡山遺跡、東京都豊島区御殿前遺跡、愛媛県松山市久米官衙遺跡などがそれであり、飛鳥淨御原令以前に成立した初期評衙の可能性が指摘されている。

仙台郡山遺跡は、多賀城成立以前の東北支配の拠点としての機能が考えられ、御殿前遺跡は後に律令国家の軍事を支える東国の拠点、久米官衙遺跡は古くからの瀬戸内海の海上

交通に關係する拠点であり、百濟救援のために九州に向かった齊明天皇が2ヶ月ほど滯在した石湯行宮の關係が指摘されている。このように、初期評衡の可能性が指摘される遺跡は、国家の重要な拠点に分布していることが分かる。

こうした歴史的な背景から考えると、第2段階の古代山城は、天智朝で行われた古代山城を発展的に継承したものであり、軍事的機能はもちろんのこと、地方支配の拠点として、また重要な交通路を管理する意味も持っていたと考えられる。また、第2段階の古代山城は、筑前国に2城（雷山城、阿志岐山城あることを除くと、筑後国（高良山城）、肥後国（鞠智城）、豊前国（御所ヶ谷城）、周防国（石城山城）、備中国（鬼ノ城）、讃岐国（讃岐城山城）に各1城のみであり、また令前国単位で見ても、筑紫国が3城となるが他は、一国に一城のみとなる（周防国は天武10年（681）に周芳国とみえ、吉備国は持統3年（689年）の飛鳥淨御原令により備前・備中・備後に分国、筑紫国・肥国・豊国も淨御原令前後に分国か）。これらのことから想像すれば、第2段階の古代山城は、中央の命により西日本の国単位に置かれた施設であり、それぞれの地域の拠点となる場所の防衛に主眼を置いていたとも考えられる。

なお、第2段階の古代山城が天智朝なのか天武朝なのかは決め手を欠くが、三間に代表される交通路を扼する施設の成立は天智朝後半以降（天武元年（672）6月24日条に鈴鹿関司がみえる）と考えられること、中央の意思を受けて地方を統治する国司の派遣は天武朝から制度化（天武5年（676）正月25日条）されることなどを考えれば、天武朝の早い時期に築城が計画された可能性がある。

（2）第3段階の古代山城 天武朝の緊張

天武天皇の時代にも軍事的緊張をうかがわせる記事がある。

- ①天武12年（683）11月甲申朔丁亥（4日）。諸國に詔して、陣法を習はしむ。
- ②天武13年（684）二月庚辰（28日）。淨廣肆廣瀬王・小鎌大伴連安麻呂、及び判官・錄事・陰陽師・工匠等を畿内に遣して、都つくるべき地を視占めたまふ。是の日に三野王・小鎌下悉女臣筑羅等を信濃に遣して、地形を看めたまふ。是の地に都つくるとするか。
- ③天武13年（684）閏四月壬午朔（5日）に詔して曰はく「來年の九月に、必ず聞せむ。因りて百寮の進止・威儀を教へよ。」又詔して曰はく、「凡そ政要は軍事なり。是を以て、文武官の諸人も、務めて兵を用ひ、馬に乗ることを習へ。則ち馬・兵並て當身の裝束の物、務めて具に備へ足せ。其れ馬有らむ者をば騎士とせよ。馬無からむ者をば歩卒とせよ。並に當に試練へて、聚り會ふに障ること勿。若し詔の旨に忤ひて、馬・兵に不便有り、亦裝束闕くこと有らば、親王より以下、諸臣に連るまでに、並に罰へしむ。大山位より以下は、罰ふべきは罰へ、杖つべきは杖たむ。其れ務め習ひて能く業を得む者をば、若し死罪と雖も、二等を減らさむ。唯しあが才に恃りて、故に犯さむ者ののみは、赦す例に在らず。」
- ④天武13年（684）閏四月壬辰（11日）。三野王等ら、信濃國の圖を進れり。

①③は軍事に係る政策であり、その間に信濃遷都が検討されていることが分かる。この頃、東アジア社会の緊張を告げる記事はなく、なぜ、この時期に軍事関係の施策と、信濃

遷都計画が進められたかはよく分からぬ。ただし、古代山城の性格として軍事的な機能を認めるならば、この一連の記事は何らかの軍事的な緊張が生じたことを受けての施策であり、古代山城その緊張関係と関係する可能性がある。

(3) 古代山城の築城

古代山城は東アジアの緊張関係を受けて、国防のために築城されたと考えられる。白村江の敗戦を受けて、第1段階の山城が急ピッチで整備されたのであろう。天智7年の新羅使の倭国訪問により、対外的な緊張関係は去ったが、天武天皇は天智天皇の政策を踏襲し、引き続き古代山城の築城を行った。

しかし、第1段階の山城が唐・新羅連合軍の来襲を意識していたのに対し、第2段階の山城は、重要な港湾の押さえとして、また地方支配の拠点としての役割も譲せられた。つまり国家による地方支配の一翼を担っていたと考えられる。そして、山城の形態そのものも中央により規格化され、統一的な仕様に則って築城された。

第3段階の山城は、天武朝末年の軍事政策の一環として築城されたと考えられる。軍事政策が行われた背景には何があったのかは明らかでないが、信濃遷都が画策されるなど何らかの軍事的な緊張関係が生じた可能性もある。これらの山城はいずれも天武末年に作られたと考えられる直線的な駅路を強く意識して作られており、複数の山城が駅路を通じることにより相互に連携し、防衛網を形づくっていた。

以上のように3段階の山城は各段階に、築城の目的や背景、防衛思想に違いがあったと考えられる。

5. 律令国家と鞠智城

(1) 鞠智城の謎

鞠智城は稻田分類では第2段階に位置づけられるが、他の第2段階の山城が持つ、港湾との関係は認められず、平地の施設との関係も不明である。また、多くの山城が奈良時代前半までには廃絶しているのに対し、10世紀中頃まで存続するなど極めて特異な様相を呈している。また、奈良時代頃からは、地方官衙に見られる政治的な拠点としの機能や収納機能などが強化されているようであり、平地の地方官衙と同様の性格を有したと考えられる。そのことが、鞠智城を10世紀中頃まで存続させることにつながったと思われる。

ちなみに一般的な地方官衙の廃絶時期も10世紀中頃前後であり、その要因として中央集権体制の崩壊が挙げられている。

さらに、鞠智城を交通の要衝に立地しているとする評価もあるが、鞠智城に向かう官道はあるにしても、その存在をもって交通の要衝にあたるとは言えない。肥後国の駅路の本線は筑後国から肥後国府を経由して薩摩国府へと向かう駅路であり、鞠智城を経由しようとすると大きく肥後国府へは大きく迂回することになる。また、豊後国へ向かう路線が鞠智城の直下を通過する可能性はあるものの、この路線に駅家が置かれた形跡はなく、重要路線と評価できるか否かは不明である。なによりも、鞠智城は直線的な駅路成立以前の築城の可能性が高く、現在想定されている駅路との関係で評価するのは、適当ではない。

鞠智城は計画的な発掘調査によって様々なことが分かってきたが、一方で数ある古代山城の中でも最も評価しにくい山城なのである。

(2) 鞠智城の評価をめぐって

鞠智城の築城目的としては、以下の説が挙げられている。

- ①有明海から侵攻する敵に対する備え
- ②大宰府の後方支援のための基地
- ③熊襲・隼人に対する備え
- ④菊池盆地の押さえ

しかし、いずれの説も決め手を欠く。①については、第3段階の古代山城には、こうした特徴も見られるが、第2段階に単独で内陸部に造られている鞠智城にこのような役割を見いだせるかは疑問である。仮に有明湾に敵が上陸した場合、敵が鞠智城を目指すとは考えがたく、その軍事的な役割ははなはだ疑問である。②についても、鞠智城と大宰府は80km程度離れており、律令の規定では3日弱の行程となる。緊急事態に対応するためには、いささか距離が離れすぎている感を受ける。③は、東北の城柵と対比させる考え方であるが、東北の城柵が、前線に設置されているのに対し、鞠智城は隼人との境界からは距離を置いている。少なくとも、肥後南部までは天武朝以前に國家の支配領域に組み込まれていたと考えられ、鞠智城は約100km、隼人との境界からは離れており、やはり軍事的な意味合いは低いと考えられる。なによりも、和銅6年(713)、養老4年(720)の隼人の反乱鎮圧にも鞠智城は現れていない。

④は穀倉地帯である菊池盆地を支配するためというものであるが、これは官衙としの機能が拡充される奈良時代以降には成り立つだろうが、築城時点まで遡らせてあてはめることができるかは疑問である。古代山城の築城目的のひとつは軍事にあり、鞠智城にも軍事的な機能が期待されていたと考える。少なくとも、他の古代山城が廃絶する奈良時代以降の鞠智城と、築城時の鞠智城の性格は完全には一致しないと考えられる。

(3) 第2段階の古代山城として、今後、視野にいれておくべきこと

鞠智城がなぜ造られたのか、当初、どのような機能を有していたのか、現状では、はっきりと分からぬ。ただし、第2段階の古代山城と見ると、他の同時期の古代山城の特徴から、今後の検討にあたって注意すべき点として以下の点が挙げられるのではないだろうか。まとまらない話のまとめとして、そのことを掲げておきたい。

- ①平野部の施設との関係 鞠智城の山麓に官衙的な施設が存在するか(国府前身官衙)?
- ②肥後国府の成立。最初から熊本市内にあったのか。

※仮説 菊池盆地に肥後国府につながる官衙が存在。鞠智城はその施設とセットで肥後地域の防衛のために第2段階の古代山城として成立。国府は後に現在の熊本市内に置かれ、平地無の官衙は廃絶するが、菊池盆地の重要性から鞠智城は、国府の出先機関として長期間にわたって存続。

- ③菊池川の河川交通と菊池盆地から有明海に向かうルート、物資の輸送

※仮説 高良山城と筑後国府前身官衙、筑後川の関係と同様、菊池盆地においても鞠智城、官衙、菊池川が密接に関係。菊池川が河川交通路として重要な意味を持ち、河港も存在した。



図1 古代山城の分布

山城	所在地	山城	所在地
1 粟智城	熊本県山鹿市・菊池市	14 把木城	福岡県朝倉市
2 金田城	長崎県対馬市	15 麗毛馬城	福岡県飯塚市
3 大野城	福岡県大野城市	16 御所ヶ谷城	福岡県行橋市
4 基肆城	福岡県筑紫野市・佐賀県基山町	17 唐原山城	福岡県上毛町
5 長門城	山口県下関市?	18 おつぼ山城	佐賀県武雄市
6 常城	広島県府中市・福山市?	19 帝隈山城	佐賀県佐賀市
7 芙城	広島県福山市?	20 石城山城	山口県光市
8 屋嶋城	香川県高松市	21 永納山城	愛媛県西条市
9 高安城	奈良県平群町・大阪府八尾市	22 讀岐城山城	香川県坂出市
10 雪山城	福岡県糸島市	23 鬼ノ城	岡山県總社市
11 文山城	福岡県みやま市	24 大瀬小瀬城	岡山県岡山市
12 阿志岐山城	福岡県筑紫野市	25 摺磨城山城	兵庫県たつの市
13 高良山城	福岡県久留米市		



図2 濑戸内海の航路と駅路・古代山城

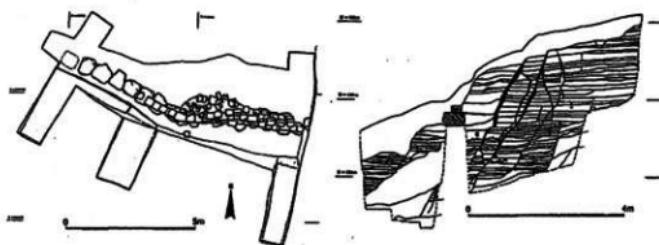


図2 第1次調査平面図(1:150)

図3 第1次調査断面図(1:100)

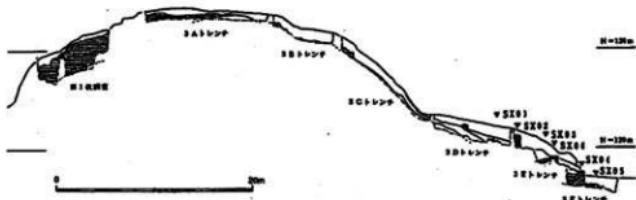


図1 酒船石造跡(兩據宮)

表1 『続日本紀』にみえる主な外交使節と日数

到着			到着地	期間	都の対応			期間	入京等		
年	月	日			月	日			年	月	日
文武	元	10 28	筑紫	13	11	11	陸路と海路から出迎え	80	2	1	1
	4	11 8						54	元	1	1
大宝	3	1 9						111	3	閏4	1
慶雲	2	10 30		14	11	13	騎兵を招集	45	2	12	27
和銅	2				3	15	陸路と海路から出迎え	65	2	5	20
	7	11 11	筑紫	5	11	15	使者・騎兵派遣	41	7	12	26
養老	3	5 7						89	3	閏7	7
	5	12									
	7								7	8	8
神龜	3								3	5	24
天平	4	1 22	筑紫		3	5	大宰府へ召す	65	4	5	11
	6	12 6	筑紫					71	7	2	17
	10	1	筑紫								
	14	2 3									
	15	3 6									
天平 勝宝	4	閏3 22	筑紫	7 閏3	28		隨に報告	75	4	6	14

天平	4	9	16	陸奥か?								
宝字	7	2	10	筑紫								
	8	7	19	博多津								
神護 慶雲	3	11	12	対馬	38	12	19	大宰府に使者派遣			元	3
宝龟	10	7	10			10	4	新羅使の入京審査	75	11	1	3



図3 金田城（第1段階）



図4 屋島城（第1段階）

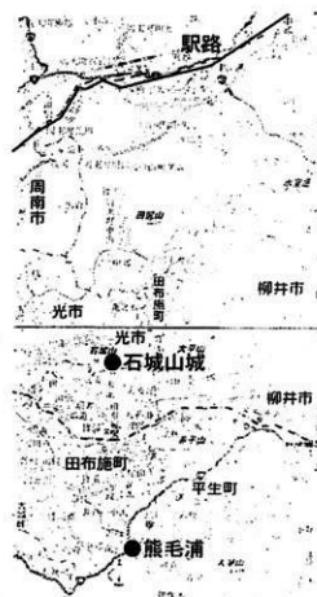


図5 石城山城（第2段階）

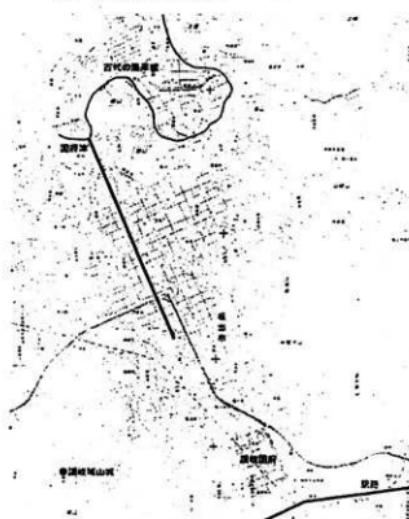


図6 鶴ヶ城山城（第2段階）

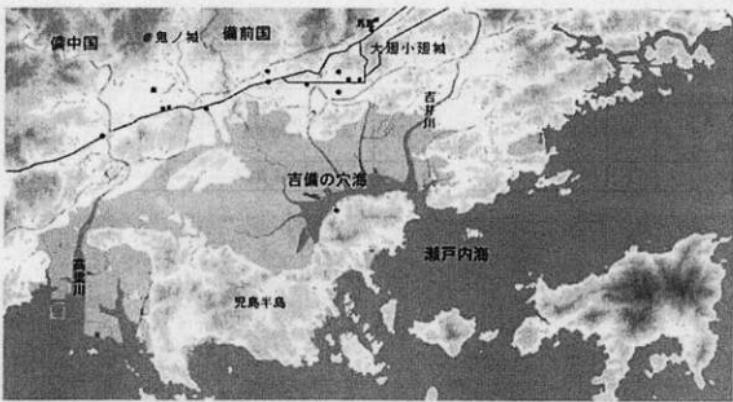


図7 鬼ノ城（第2段階）

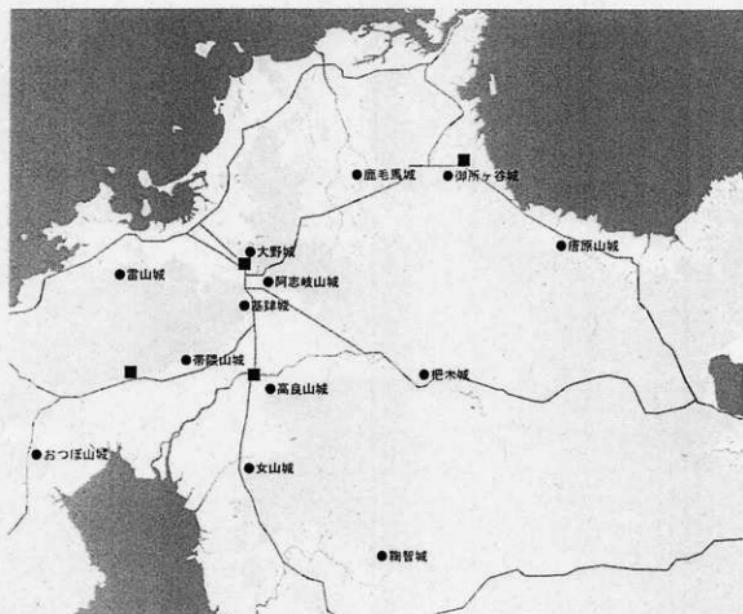


図8 御所ヶ谷城（第2段階）

図9 高良山城（第2段階）

山城	標高	立地	駅路との関係	稻田分類
1 駒智城	145m	内陸		第2段階
2 金田城	276.2m	海岸		第1段階
3 大野城	410m	大宰府	駅路近接	第1段階
4 基跡城	414m	大宰府	駅路近接	—
5 長門城	—	海岸？		—
6 常城	—	内陸地方拠点か	—	—
7 芙城	—	内陸	—	—
8 屋嶋城	270m	海岸		第1段階

9	高安城	487m	内陸	—	
10	雷山城	400~480m	内陸		第2段階
11	女山城	200m	内陸	駅路近接	第3段階
12	阿志岐山城	140~250m	大宰府		第2段階
13	高良山城	312m	内陸地方拠点	駅路近接	第2段階
14	杷木城	145m	内陸	駅路近接	第3段階
15	鹿毛馬城	80m	内陸		第3段階
16	御所ヶ谷城	250m	港湾・内陸	駅路近接	第2段階
17	唐原山城	80m	港湾・内陸	駅路近接	第3段階
18	おつぼ山城	66.1m	内陸	駅路近接	第3段階
19	帯隈山城	175m	内陸	駅路近接	第3段階
20	石城山城	362m	港湾・内陸		第2段階
21	永納山城	132.4m	港湾・内陸	駅路近接	第3段階
22	讃岐城山城	462m	港湾・内陸	駅路近接	第2段階
23	鬼ノ城	397m	港湾・内陸	駅路近接	第2段階
24	大畠小瀬城	198.8m	内陸	駅路近接	第3段階
25	播磨城山城	450m	内陸	駅路近接	—



この電子書籍は、第5回鞠智城跡「特別研究」成果報告会 発表レジュメ集5を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：第5回鞠智城跡「特別研究」成果報告会 発表レジュメ集5

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦2022年7月1日